仮面ライダーギアス

回帰の福音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダーギアス

【Ｎコード】
Ｎ１０４０Ｗ

【作者名】
回帰の福音

【あらすじ】
いたって普通の高校生活を送っていた青年、水樹　聡は、自分の運命の歯車を大きく変える戦いに立ち向かう。
例えそれが、残酷な運命であっても……

設定（前書き）

投稿に失敗しているかもしれませんが、主人公とライダーの設定です。

設定

・　水樹（みずき）　聡（さとる）
・　身長　１７７？
・　年齢　　１８歳
・　体重　　５７？（意外と軽め？）
・　よく言う言葉
「自分不器用なんで」他・　　ＣＶ：櫻井　孝弘
・　　容姿　　：やや青みのかかった黒髪で短髪、まあどちらかと言えばかっこいいと言われるようなＢ級のイケメン顔

：基本的にめんどくさがり。でもやる時はやるという性格。学校での成績は悪いが、直感的ひらめきで何とかして生活している。中学から吹奏楽部に所属して音感はまあまあ良い。一人称は人によって変わるが、基本的に俺。

仮面ライダーギアス

：　「歯車と記憶」を内包したガイアメモリを使用。　群青色のドライバー『ロストドライバー　改』を使用して変身する。見た目は仮面ライダーアクセルに似てるが、後ろと肩の装甲があまり無く、色は黒中心で足のすねが歯車のようになって自らの意志で回転させる事ができる。リリカルなのはの八神はやてと同じような上着を着ている。別のメモリを使用すれば他のライダーに変身可能。
　必殺技は足のギアを回転させて２回蹴りを入れる
『ギアローテーション』腕を１回転させてアッパーを食らわす
『ギアストライク』

ロストドライバー　改

：　基本的にロストドライバーと同じだか、左腰に「アップロードスロット」というスロットがある。他のライダーに変身してフォームチェンジする時に基本的に使用する。見た目は仮面ライダーアクセルに似てるが、後ろと肩の装甲があまり無く、色は黒中心で足のすねが歯車のようになって自らの意志で回転させる事ができる。リリカルなのはの八神はやてと同じような上着を着ている。別のメモリを使用すれば他のライダーに変身可能。

必殺技は足のギアを回転させて2回蹴りを入れる

『ギアローテーション』腕を1回転させてアッパーを食らわす

『ギアストライク』

ロストドライバー　改

：　基本的にロストドライバーと同じだか、左腰に「アップロードスロット」というスロットがある。他のライダーに変身してフォームチェンジする時に基本的に使用する。

設定（後書き）

荒らしはお断りします。感想と注意点をお願いします。

変わらない日常。（前書き）

本編にやっとたどり着いた…

変わらない日常。

「マジでヤバいな～。はぁ～」
俺、水樹　聡はため息交じりでつぶやきながら下校していた。
「なーに独り言しゃべってんの？みっ君？」
「うおっ！？びっくりしたー！！何だよ奈々？つーかみっ君呼ぶな。」
俺の後ろからいきなり現れたクラスメート。
水城　奈々だ。昔からの幼なじみでクラスから”付き合ってんじゃね？”と思われているが、あくまで幼なじみだ。
ちなみに苗字はみずしろである。
「いいじゃん。別に。それよりもテスト、悪かったね～。私とはてんで違うもんね～♪」
「オイ、人をけなすなバカ。」
「バカはそっちだけどね～♪」
「うっせぇよ。」
なんだかんだで、漫才みたいな事をしつつ、いつもの道を歩いていった。家はご近所同士なので、帰り道は基本的に一緒である。
「ねえ～ちょっとアイス食べに行かない？早めに帰れたし。」
「……まあ……いいかもな。」
今は夏。しかも水筒も切れているし悪くないな。
ただ、この寄り道が後に大きな事件に出くわすとは、俺は思っても見なかった。

変わりゆく日常。（前書き）

まだまだ変身は先になります。

さあどうなる事やら。

変わりゆく日常。

水城と一緒にアイスを食べに行って、俺は一緒に同じ帰り道を歩いていた。

「どうしたの？さっきから浮かない顔して？」

「……何でもない…。」

『ん～…やっぱりやるべきか～。でもな～。』

俺は気がついたら水城の事が好きになっていた。いつもそばにいてくれたし、困った時は助けてくれていた。でも助けられっぱなしで、あまりお礼をしたことがなかった。

「（よし、やろう。）なあ水城。」

「？　どうしたの？みっ君？」

「あの…今度の休みに…遊…『水樹　聡だな。』。」

突然後ろから、黒いフードを被った黒ずくめの人が声をかけてきた。

奇妙な仮面を被り、背丈は俺と同じくらいで、声はボイスチェンジャーを使っているような感じだった。

「はい…そうですけど…何か？」

「ここで消えてもらう。」

と言った瞬間、俺は黒ずくめの人の後ろに放り投げられた。

「…ッ！？……がはっ！？」

「みっ君！！」

「動くな。女。」

と言いつつ、ＵＳＢメモリのようなものを取り出し、メモリについているスイッチを押した。

《Ｖｕｌｔｕｒｅ！》

とメモリを起動させ、近くにいた烏に向かって投げた。

「なっ…！？」

「何…あれ…？」

すると烏は禿鷹のような怪物”バルチャー・ドーパント”に変身した。

「いけ……」

黒ずくめが言うとバルチャー・ドーパントは水樹に襲いかかって行った。

「ッ！？う…うわっ！？」

あまりの出来事に動けず、顔を伏せた。

その時、

「ガハッ！？」

襲いかかってきたドーパントは何者かによって撃墜された。

「やっと見つけた…」

と中学生ほどの青年が、不思議な銃を持って、俺の後ろに立っていた。

変わりゆく日常。（後書き）

感想・ご指摘お願いします。

変化した日常。（前書き）

主人公変身してないのに別ライダー登場。
＋部隊長登場。

変化した日常。

「またお前か。倒されにでも来たか？」

「そんなつもりはない。お前を倒さなければ、多くの世界がお前の下になびく。」

黒ずくめと青年は呆然としている2人をほっといて、会話を続ける。

「まあ、いい。　匣の回収になったら、いずれにしてもお前みたいな奴と出会うからな。ここで潰してやる。力を失った仮面ライダー君？」

『……匣？』

「ふざけやがって。力を失ったが、変身できないことは無い。そして、匣は絶対に渡さない。」

青年は持っていた銃と懐から何かの絵が描かれたカードを取り出し、カードをを銃に装填した。

《ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ》

「変身！」

《ＤＩＥＮＤ》

真上に向けて引き金を引いたかと思うと、プレートが飛び出し、人の形を模したヴィジョンが動き回る。　やがて、ヴィジョンが重なり、プレートが顔面に刺さり、体が青く染まる。

「別世界のディエンドか。まあ、弱体化したお前など雑魚に等しいがな。」

「さあどうかな！」

黒ずくめに銃口を向けたが…

「ッ！？ガハッ！？」

後ろから超高速の何かがディエンドを攻撃した。

「くっ……ワームか…しかも2体。」

仮面の下で顔を苦ませながらも、新たなカードを装填させる。

《ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＢＬＡＳＴ》

装填させた銃で真上に発砲させる。銃弾はワームとドーパントに向かって当たる。しかし威力が弱く、あまり効果が無い。

「キツいな…仕方が無い……”はやて”！来てくれ！」

「もう来とるで～！」

と、ディエンドが叫ぶと、白の上着と帽子被った女性が舞い降りて来た。

「ちっ、仲間か…まあいい。　この女をもらって行くか。頼んだぞ。お前たち。」

「みっ君！！ッ！？」

「水城！」

水城は黒ずくめに気絶され、黒ずくめと共に消え去って行った。

「水城！クソッ！」

「あかん！止まるんや！」

水樹は黒ずくめのいた場所に駆け出すが、既に消え去っていた。

「ッ！？　危ない！」

「しまった！」

「ッ！！」

振り向いて上を見上げると、ドーパントが自分に向かって襲いかかって来ていた。

変化した日常。（後書き）

感想・ご指摘お願いします

2人の事情。

「ッ！？わっ！！」

「くっ…！ブリューナク！」

とっさに白黒の魔導師は　魔力の弾丸をドーパントに撃ち込む。

「キリがない……はやて！一旦退こう！」

「オッケー。クラウ・ソラス！」

再びドーパントとワーム2体に向かって攻撃した。今度は威力が高く、当たった瞬間、球体状の衝撃波が発生した。

「なっ…！？…うわっ！？」

「ちょいと我慢してな。」

白黒の魔導師が少し宙に浮いて、水樹を掴む。

「水城……」

水樹の声は、虚しく響いていた。

どこかの廃墟に3人は、集まっていた。外の街は、所々から火柱が

上がっていた。

「もうこの世界も崩壊寸前か……」

「かもなぁ～……私の時もこんな感じやったわ～……。」

「すまない。あんた達は何の話をしてるんだ？」

「ああ、すまない。水樹…奈々…だったよな。俺は”海堂　葵”。この世界とは違う世界の人間で、仮面ライダーだ。」

「仮面ライダー？あんたがさっき変身した、あれか？」

「ああ、仮面ライダーっていうのは……」

（仮面ライダーと自身のライダーについて説明中）

「ってな訳。大体分かったか？」

「ああ、大体。　そっちの女性は？」

「ああ、そやな。私は時空管理局遺失物管理部”機動六課”課長”八神　はやて”。なんやけど……。」

「けど？」

「まあ、私の過去をザラッと言うな……」

（ＪＳ事件までの過去の経緯を説明中）

「という訳なんや。」

「おぉ……。ある意味凄いな～。でも、なんやけどってどういう事何だ？」

「実はな…私の世界も…あいつに潰されてもうたんや…。私以外の仲間もやられてもうて…私もあかんって思うたんや。」

「その時に助けに来たのが、俺、海堂ことディエンドという訳なんだ。」

「それでな…私がいた世界はさっきの男に乗っ取られたんや。」

「酷い事言うかも知れないが、もうあの世界はもう無理だろう。」

「分かってる……。だから、食い止めたいんや。」

「ああ…分かってる。」

「悪いけど、何で俺は狙われんだ？」

「それは、お前の中にある”匣”ってゆう宝が目的なんだ。」

「何なんだ。それ？」

「”匣”というより”歯車”の方が正しいな。」

「”歯車”？」

水樹は疑問に思った。

2人の事情。（後書き）

なかなか変身できない……

感想・ご指摘お願いします。

動き出した3人。（前書き）

むぅ～…未だに使い方が分からない……
慣れるまで、時間がかかりそうです。
すみません。自分不器用なので……

動き出した3人。

「ああ、そうだ。お前の体内に”歯車”という”世界を動かすための宝具”だ。それがお前の体内にある」

冗談だろ……

冗談抜きに話す海堂に水樹は唖然としてしまう。

「じゃあ……なんで……俺の体の中に……あるんだよ……？」

「分からない。普通はその世界によって、歯車をその場所に隠されているんだけどな。まっ、体内にあるのは、珍しいタイプの世界だな。ここは。ははっ 」

のんきに喋る海堂に、水樹は疑問に感じた。

「 ん？ 待てよ。もしその歯車が無くなったら、どうなるんだ？」

「 歯車が無くても、動く世界は多くいるが、基本的には……

ゆっくりと消えていく」

消えていく……世界が……

水樹は、この言葉を聞いて、しばらく何も話すことが出来なくなってしまった。

「……じゃあ……なんであいつは……歯車を狙うんだ……？」

「簡単だ。

世界征服だ」

世界……征服……

子供が言いそうな……あの世界征服？

「あいつ……平野　蓮は……世界中の歯車を集めて、何かデカい事でもしようと…「　なんで、そいつの名前……知ってんだよ…」

……」

水樹はふと呟くように、訪ねる。

「話したほうが、ええんとちゃうん？」

「……いや……まだ話さない。　こいつも一緒に連れて行く。その時にいつか話す」

はやてと海堂は重苦しい顔をしながら話した。

「連れて行くって、俺はお前たちみたいに強くなんか…「いやっ、手はある」……何だって？」

水樹は唖然とする。

「ああ、それがこいつらだ」

海堂は、群青色のドライバーと白と黒で基調された、先程の戦いで目にしたメモリを取り出した。但し、そのメモリは端子が青色で、ドーパントに使用したメモリと違ってゴツゴツした感じのデザインでは無く、純粋なイメージを与えるようなデザインだった。

「『ロストドライバー　改』と『ギアメモリ』だ」

海堂は、群青色のドライバーと白と黒で基調された、先程の戦いで目にしたメモリを取り出した。但し、そのメモリは端子が青色で、ドーパントに使用したメモリと違ってゴツゴツした感じのデザインでは無く、純粋なイメージを与えるようなデザインだった。

「『ロストドライバー　改』と『ギアメモリ』だ」

「ろす……何だよそれ？」

「簡単に言えば、こいつを使えば、お前は仮面ライダーになれる」

「ッ！？」

「まっ、まだ分からないけどな。　なんせこれは……適合しなければ、変身者は…瀕死の重傷を負う」

「ッ！？」

「けど、お前は歯車を持っている。歯車の力で、なんとか変身できるだろう」

「そうか……」

「一応渡しておく。　それじゃあ、行こうか。別世界へ」

「そうやね。水樹君、私らについて来てな」

水樹ははやてに言われた通りに、２人について行った。

とある異世界

「八神　はやてか……用心に越したことは無いが、手を打っておくか……」

黒ずくめの男、平野　蓮は、真っ白な空間に浮かぶ、水城　奈々を見据えて呟く。

「お前の体、利用させてもらうぞ。ふっ……　面白い事になりそうだな……」

蓮は、怪しく微笑んだ。

動き出した3人。（後書き）

感想・ご指摘お願いします。

別世界へ。別世界で。（前書き）

いよいよ別世界へ！！

別世界へ。別世界で。

水樹、海堂、はやての3人は、何故か最寄りの駅の非常口のドアの前にいた。

「なあ、何で駅の非常口の前にいるんだ？別世界に行くんじゃないのか？」

「ああ、行くさ。これからな。」

「でも……非常口だけど……」

「まあ見とき。ちょいと驚かんといてな」

「？」

水樹は疑問に思いつつ、海堂の行動を見た。

「開け、我が扉。我が世界を紡ぐ、異なる扉よ」

海堂はドアに向かって、なにやら魔術の詠唱みたいな言葉を発した。

「？」

「行くぞ」

「せやな」

海堂はドアを開けると、白い光がドア一面に差し込んで来た。　水樹は驚きつつも、2人について行った。

ドアに入ってみると、辺り一面真っ白な空間が広がっていた。

「何だよ……ここ？」

「ここは俺の固有世界。言い換えれば、ちょっとした家みたいなもんだ」

家って……なんか家具とかあるだろ……

水樹は内心思いつつ、一つ気になる事があった

「何でこんな事が出来るんだ？」

「それはあまり言えないが、まあいい。少しくらい話すか。俺の事を」

水樹は海堂の話を聞いたそして入ってきたドアが砂のように消えた。

「俺は色々な世界を回る組織『企業』の1人だ」

「企業……？」

「ああ。主な活動内容は世界の歪みの調査、そして、イレギュラーの発生の抑止又は発生者の逮捕だ」

「へぇ～。じゃあ、はやてを助けたのも？

「まあそうだが、本当は蓮の確保が目的だったんだ」

「そうだったんだ……」

「奴は……企業の新入りで……企業最強の男でもあった……」

「なっ…！？」

「奴は、複数の固有世界を作れるし、多くの世界の力を持っている。技術面でも天才だった。そのせいで、俺の持っていた多くのライダーのカードがガイアメモリに変えられてしまったんだ。はやてと出会った世界で……すまない、はやて。気にしないでくれ」

海堂はしんみりとした表情になりながら話した。はやては気にしてへんよと言葉を返す。

「奴は、歯車を使って必ず何かをする。俺はそれを絶対に阻止する。2人共、すまないが……手を貸してくれないか？」

「もちろん、当たり前やないか。」

「俺も手を貸すぜ。水城を連れ去った奴だ。ぜってー許せねー。」

2人が話すと固有世界にスライド式の扉が現れた。

「着いたみたいだ。さあ、行こうか。」

「「ああ！／うん！」」

海堂は扉を全開に開けた

出る前に、水樹はふと思った。

あの”平野　蓮”って人。顔は分からなかったけど、どこかであった気がする……

蓮の固有世界。先程いた世界とは違い、どこかの王宮の大広間のような世界に蓮が、誰かを待っていた。

しばらくして、7人の男女達が現れた。

「よく来たな。お前達。随分と時がだったな。」

男女達は黙っていた。

「機は熟した。さあ本命の計画の補助計画『七人の兄弟達』の開始を命じる」

男女達の後ろから扉が現れ、それぞれの扉へ向かって行った。

その顔は真剣な表情であった。

7人共、水樹と似た顔で……

別世界へ。別世界で。（後書き）

感想・ご指摘・質問お願いします。

人物設定　１ｓｔ（前書き）

とりあえず、これまでのオリキャラの紹介です。

人物設定　１ｓｔ

・水城　奈々（みずしろ　なな）

・体重；身長　乙女の秘密

・年齢　１７歳

・よく使う言葉

「みっ君！」

・ＣＶ　櫻井　浩美

・容姿：「Ａｎｇｅｌ　ｂｅａｔｓ！」の”仲村　ゆり”にそっくりだが、黒髪でロングヘアーで本人曰く、「みっ君と一緒にいるおかげかなっ？」との事

：一人称は私。水樹の幼なじみで、水樹に片思い中。水樹の冗談を真に受けて、大怪我を負いそうになった事があった。水樹に何かあったら、一目散に駆けつける。射撃部に入っていて、全国大会に出場した経験がある。

海堂　葵　（かいどう　あおい）

・身長　１６７？

・体重　６０ｋｇ

・年齢　１６歳？

・よく使う言葉
「ははっ…」「ふっ…」
・ＣＶ　杉山紀彰

・容姿　：『ナルト』のうちはサスケに似ているが、後ろ髪がやや長い。

世界管理組織『企業』の１人。組織内では、一中隊を率いる隊長でもある。仮面ライダーディエンドに変身に出来るが、蓮との戦いで、大半のカードをガイアメモリに変えられてしまった。過去に蓮と少しだけ一緒に行動した事がある。

平野（ひらの）　蓮（れん）

・身長，体重，年齢，容姿　　不明

・ＣＶ　３ｂ９／４２ｎＷ

元『企業』所属の謎の男。『企業』の中でも最強と謳われる男で、歯車を使って、大きな計画を実行しようとしている。用意周到で本計画以外にも、多くの補助計画がある。

人物設定　１ｓｔ（後書き）

感想・ご指摘・質問お願いします。

A（あの世の）列車に乗って（前書き）

はやてが！！……

そして水樹君がついに！

A（あの世の）列車に乗って

海堂と水樹は、少し迷惑そうな顔をしていた。
原因は、はやて……というより……

「まあ、初陣にしてはなかなかの実力だったな～水樹」

青眼で髪が真っ白になっている、はやてに……
どうしてこうなったかと言うと、数時間前に遡る……

3人は扉を開けた瞬間、驚いた。というより、ゾクッとした。　周りは夜のように薄暗く、随分古い列車の中に自分達がいることに。
そして、いつの間にか自分達の着ている服が変わっていた事に

「随分と気味の悪い世界に来たな。ははっ、この服は……見たところ、葬儀とかに着る服だな」

「よく笑えるな……幽霊でも出そうだな……意外にピッタリだな……」
「全く～幽霊なんてビビる事ないやろ。まあ、服が変わるのは、毎度の事や。てゆうか、ここどこなんやろなぁ～……って、ひゃぁ！

？」

「「っ！？　はやて！！」」

はやては、いきなり大声を発したかと思えば、クラクラとぶっ倒れた。

２人は、倒れたはやてを起こそうとした。

その瞬間。

いきなり髪を白く染め、目を青くしたはやては、どこからともなく、日本刀を取り出し、水樹の首筋に刀を当てた。　ほぼ同時に海堂も、ディエンドライバーをはやてに向けた。

「お前、”イマジン”か。何の真似だ？はやてを返せ」

「貴様等こそ、私の幽霊列車に何のようだ？」

「なっ……何か起こってんだ……？」水樹が訳も分からず、混乱している時。

「待って、”骨丸”（こつまる）。少し話をさせてよ」

女性の声が、来た方と反対の扉の方向から聞こえて来た。

女性はロングヘアーで少し厳つい目をしており、黒い半袖カッターシャツ，黒いジーンズをはいていて、文字通り真っ黒な服装をしていた。

骨丸と呼ばれたはやては、応えた。

「しかしソラ、こいつらはどうやって列車に入って来たか分からないんだぞ。しかも武器を持っている。危険だ。」

「それでも。それにその子返してあげて。」

「しかし…「それでも」…だが…「いいから！」……分かった……」

と言われて、はやての髪と目は元に戻り、はやての体から白い狛犬が現れた。
よく見ると狛犬の体から骨のオーラが出ていた。

「う～ん……何や、何が起こったんや？」

「何も覚えてないのか？」

海堂の質問にはやては頷いた。　海堂は先程までの経緯を説明した。

「へぇーそんな事がなあ～」

「迷惑をかけてごめん。あっ、自己紹介するね。私はソラ。こっちは相棒のイマジンの骨丸。私達は、この”幽霊列車”の乗組員なの」

「「幽霊列車！？」」

はやてと水樹の2人は声を揃えて言った。

「幽霊列車と言っても、現世とあの世のバランスを調節するのが仕事よ」

「へぇ～そうなんだ。あっ、そういえば海堂から聞いたんだけど、イマジンって時を乱す怪人なんだよな？何で一緒にいるんだ？」

「ふっ…イマジンと言っても、人間に協力するイマジンだっているんだ。それよりも、この世界に”電王”はいるのか？」

「まあ、いるけど時間警察の発達でほとんどのイマジンの事件は減っていて、治安が維持されてる。けど……」

「けど……？」

海堂はソラに質問するが

「むっ、ソラ、まただ。歪みを感じる。」

「っ！？分かった！すぐに向かおう！」

「分かったソラ。今回は私に行かせてくれ。ちょうど体はいるから……なっ！」

「わっ！？」

骨丸は再びはやての体に乗り移る。

『わっ！？　なんやどうなっとるんや！？』

「すまない、はやて。少し体を借りるぞ。この体、気に入ったぞ」

「ふっ……ちゃんと返せよ」

「分かっている」

現場には、イマジン2体が暴れまわっていた。

「よし、行くか」

と言葉を発したKはやて（骨丸＋はやて）は懐から電王と同じようなベルトを取り出し、腰に巻き、電王の持つライダーパスと同じ物を取り出す。
ベルトからは不気味な音楽が流れる。

「変身」

【Ｓｋｕｌｌ　ｆｏｒｍ】

パスをベルトにセタッチし姿が変わる。
やがて、青い炎と共に装甲が現れ、装着される。
『なんやこれ！！　私、仮面ライダーになっとる！！』
「ああ、仮面ライダー幽汽だ」
Kはやてが変身したのを終えると、海堂が、
「お前も変身しろよ」
「えっ」
「まだ一度も変身したこと無いだろ。ちょうど2対2だしな。ははっ」
「……よし！　いくぜ！！」
水樹とロストドライバー　改　（以降、Cロスト）を取り出し、腰に巻き、ギアメモリを起動させる。
『GEAR』
「変身！」
メモリをベルトのスロットに落とし、挿入させる。　そしてそのままドライバーを右に倒す。

『ＧＥＡＲ！』

歯車のような魔法陣が現れ、水樹の体がだんだんと変わり、変身が完了する。
近くにあったビルのガラスに映った自分の姿を見る。

「これが……俺……」

「ふっ……そうだ。『仮面ライダーギアス』だ」

「ギアス……俺は……仮面ライダー……ギアス！！」

この日、水樹は初めて仮面ライダーに変身した。

A（あの世の）列車に乗って（後書き）

Kはやての容姿は、リインフォースとユニゾンインしたような感じです。

感想・ご指摘・質問お願いします。

初陣、しかし裏では既に始まりを見せる。（前書き）

バトル描写が難しい……
やっと水樹君の初バトルです。

しかし難しい……

夏休みの宿題で忙しく、更新する隙が無くてすみません。　まあ、自分が宿題しなかったのが悪いのですが……不器用なんで……

初陣、しかし裏では既に始まりを見せる。

水樹がギアスに変身した瞬間をビルの屋上から眺めている者がいた。風貌は真っ黒なロングコートを着て、オールバックの髪型をしているが、顔は水樹と全く同じ顔だった。

「……」

「感心しないな。”真二”」

「ああ、あんたか……何故此処にいる？　”七瀬”自分の行った世界はどうした？」

こちらも水樹に全くと言ってもいい程似た顔をし、水樹が着ていた学生服を着た男、”七瀬”はあっさりと答えた。

「もうとっくに落とした。今や俺達の配下のひとつとなっている。」

「そうか……さすがは兄弟達の中でも最高の男だ。仕事が早い……」

「相変わらず、無愛想だな、お前。」

「すまない……オリジナルと全く同じ人格であるお前とは違って俺は……」

「気にするなって」

七瀬は、真二を慰めるような感じで会話を止めた。

「これからどうするんだ？」

「自分の世界の回収に向かう。これから行くつもりだったが、あの3人が気になってな。ちょっとした観察を」

「分かった。俺はもう少し此処にいる。」

「分かった。気をつけてな……」

「お前もな。」

と言って、真二はビルから消え去った。
残った七瀬は、水樹を見つめて、

「兄さん。あんたはこれから、絶望し、二度と立ち上がれないかもしれない戦いが待っている。それまで死ぬな。絶対に」
と呟いた。

「さて。俺は俺の”計画”を進めるとしますか。」

ギアスに変身した水樹は…

「オラァ！　すげー！！　力が漲ってくる！　ズァラァ！」

「ぬぉ！？　クソッ、せっかくこの世に戻って来れたのに、何だってんだお前は！？　ぐぉ！？」

イマジンの攻撃をかわしては、攻撃するヒット&アウェイ戦法で戦況を優位に進めていた。

そんなギアスの戦いを

「ほう、なかなかやるではないか。」

『ほんまやな～初めてにしてはなかなかやるな～』

幽汽に変身している骨丸とはやては、ギアスに感心しつつ、自分の敵を骨丸の持っていた日本刀で切り伏していく。

『なんだ……この感覚……このメモリから色々な事が分かる……いや、それだけじゃ無い……俺の体から力が……目覚めようとする力が……湧き上がってくる！』

「はっ！　オラァァァァァ！」

「のぁァァァァァァ！」

ギアスはイマジンの肩に足を乗せ、足のローラー状のギアを回転させ、攻撃する。

「くっ……クソが！！」

「ほんじゃ、とどめと行くか。」

ギアスはドライバーからメモリを抜き、右腰のスロットに差し込む。

『ＧＥＡＲ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ！』

「オラァァ！　ズァラァ！」

ギアスは足のギアをフル回転させ、右足から左足へと回し蹴りを食らわせる。

「ギャァァァァ！」

イマジンは回し蹴りを食らい爆発、消滅した。

「”ギアローテーション”ってところか……」

ギアスはぼそっと呟き、変身を解除し、水樹の姿に戻る。

「ふぅ～疲れた。」

「お疲れさん。」

海堂は水樹に軽く言った。

「はっ！」

「ぐあっ！」

幽汽の方も、そろそろ決着が着くところであった。

「とどめだ」

『Ｆｕｌｌ　ｃｈａｒｇｅ』

幽汽はバックルにパスをセタッチし、必殺技を発動させる。

「ふぅぅ……はぁ！！」

「がぁアァァァ！」

鬼火を纏った日本刀を地面に叩きつけ、衝撃波を放つ必殺技、ターミネイトフラッシュを発動させ、イマジンは爆発する。

「ふぅ……」

『ふぅ～まあ、なかなか楽しめたなぁ～』

「お前がな。」

幽汽はそんな会話をし、変身を解除し、Kはやての姿に戻る。

水樹と海堂はKはやてと合流後、幽霊列車に乗り込み、現在に至る……

「評価してくれるのは嬉しいけど、そろそろはやてを返してくれ。」

「むぅ～気に入っているのだが…「いいから返す！！」……分かった。ソラ……」

ソラに言われ、渋々返答し、はやてから抜ける。

「なっ！？　めっちゃ体が重いやん！　なんでや！？」

「仕方が無いだろう。私が戦っているとしても、体はお前だ。それに、お前はあまり体を鍛えて無いだろうからな。」

「俺も初めてだから、結構体に来るな。」

水樹は疲れた表情で会話に入り込む。そんな2人を見たソラは、

「2人共お疲れ様。少し横になったら？　海堂だっけ？　ちょっと来てくれる？　話したい事があるから。」

「分かった。行こう。はやて、水樹、２人共ゆっくり休め。」

「ああ、分かった。」

「ありがとな～海堂君。」

２人は海堂に言われ、二人掛け椅子に横になり、眠りについた。

初陣、しかし裏では既に始まりを見せる。（後書き）

基本的に電王本人は出す予定はありません。すみません……

感想・ご指摘・質問お願いします。

しかし今回は少しグダグダでしたなぁ～

夢の中の危険な自分。それは未来か分からない。（前書き）

ちょっとした、閑話です。

夢の中の危険な自分。それは未来か分からない。

水樹は夢を見ていた。

周りは炎に囲まれている。　俺は例の仮面の男、平野と一緒にいた。俺の目は虚ろな目をしていた。

やれ、水樹。

俺は言われるがままに頷いた。

変身……

俺はギアスに変身した。

目の前には、赤く燃えるような体をした、巨人がいた。

その続きのような夢を見た。

ギアスに変身した俺は、炎の中に立っていた。
先程の巨人は居ず、周りは人が倒れていた。
俺は変身を解除した。

よくやったぞ……

コクリと、俺は頷いた。その瞳は虚ろのままになっていた。

その瞳に写っているのは……俺？
それだけじゃ無い。　何故かはやてと海堂が２人いた……

再び夢を見た。
今度は、真っ暗な空間に俺と見知らぬ女性が立っていた。俺は、この夢でも虚ろの目をしていた。

あなたは私のもの。

その女性は、俺に言い放ち、顔を抑え、キスをしてきた。

うっ……舌まで入れてきやがった……少しは抵抗しろよ、俺……

なんて事を思っていると、夢の中の俺はキスをされた状態のまま体が砂なっていく。
その砂は、女性の体に取り込まれていく。

そして、女性は俺と同じドライバーを腰に装着し、メモリを取り出す。

変身……！

「はっ！？　はぁはぁはぁ……」

水樹は突然夢から覚めた。

「なんだ……今の夢……」

立ち上がって、周囲を見渡した。　はやては、ぐっすりと眠っていた。

そんな顔を見て少し安心したが、あることを思った。

嫌な予感がする……

核壁の兄弟（前書き）

なんじゃ……こりゃ……

不器用過ぎる。

核壁の兄弟

不思議な夢を見た後、水樹は海堂に呼ばれて、はやてと共に海堂とソラと骨丸のいる車両に向かった。

「海堂君、何や難しそうな顔してたけど、なんやろなぁ？」

「さぁな。難しそうな話だと思うが、やだな～俺そういう話苦手何だよな～」

（基本めんどくさがりなんやな～）

なんて会話をしていると、車両の扉が開き2人は海堂達のところへ向かった。

「何の話なんだ？」

「ふっ……いきなり来てそれか……」

「悪かったな。俺が不器用で。」

「まあまあ、そない喧嘩腰で言わんとなぁ」

「お取り込み中悪いけど、本題に入りたいんだけど。じゃないと殴るよ。」

「おい、殴る事は…「黙って。」……分かった……はい……」

再び黙る骨丸を見てはやては、

（ドンマイ、骨丸……何時でも入って来てええからな……）

「で、どういった事なんなんや？」

はやては、ソラに疑問を投げつけた。

「実は、数日前から死んだイマジンがちらほら現世に現れているので、調べていると何者かが、この世界に感触しているのが分かったの。最初はあなた達かと思ったけど、一目で違うと分かったの。でもこのバカがいきなりね…」

「気にしてへんよ。」

はやては答えると、骨丸は、申し訳なさそうな顔をする。

「じゃあ、俺が初めて変身した時のも……」

「ええそう。で、今もその犯人を目下創作中。」

そんな事を言っていると、

「ソラ、まただ！今度はでかいぞ！！」

骨丸がソラに向かって言い放つ。

「分かった。すぐにいく。今度は私が行く。」

ソラは真面目に答えて、幽霊列車を現場に走らせた。

七瀬は自身の持つ”力”を周囲に漂わせた。
「嫌だな……兄さんと戦うのは。」
丁度その時、幽霊列車が現れ、はやて・水樹・海堂・ソラを残して去っていった。
「なっ！？　俺！？　」
「水樹君が……2人……？」
「なんでコイツが2人いるのよ？」
はやて・水樹・ソラは驚きを隠せないが、
「貴様……平野の部下か！？　どうやってこんな真似を……一応……名前を聞いておこうか。」
「俺の名は、七瀬　水樹。　そこにいる男のクローンの1人だ。」
「目的は何だ？　ここには、お前が求めている物は無いぞ。」
「目的か……強いて言うならば……挨拶かな……」

「ふざけやがって……」

「まっ、いいじゃん。私の仕事は世界の調節。だからとっとと出て行ってくんない！？」

ソラはユウキベルトを腰に装着しパスをセタッチさせる。

「変身」

『Ｈｉｊａｃｋ　ｆｏｒｍ』

ソラは、幽汽スカルフォームに酷似した姿、ハイジャックフォームに変身する。

「さぁ～て、それじゃあさようなら！！」

幽汽はサヴェジガッシャーを七瀬を斬りつけるが……

「俺を斬るだァ？　笑わせンじゃァねェよ。」

と言った瞬間、

ガキィィィン！！

「……え……？……なんで……」

幽汽が攻撃は、見えない壁に止められた。

「俺にこの能力（チカラ）を使わせねェでくれよ。」

七瀬は、少し荒げるような口調で喋った。

「なんや口調が変わってへんか？」

「確かに……何なんだ？」

はやてと水樹は疑問に感じるが、

（この口調、どっかで聞いた覚えが……）

海堂は、この口調が何か思い出せずにいた。

「はっ！　やぁ！！　オリャ！！　　くっ……はぁ…はぁ…クソッ。

全部弾かれる……」

幽汽は、攻撃が全て弾かれ苦戦していた。

七瀬は、同じ場所に突っ立ったまま、何も攻撃を仕掛けてこない。

「こりァ、お前ン所の力じゃァねェンだよ。」

「何ですって？」

「コイツァ、大能力者（レベル４）の拒絶防壁（リジェクト・アウト）…って言ったって、分かるわきゃねェよな。　この世界じゃよォ。　簡単に言えば、シールドってところだ。まっ、お前の必殺技なら破れると思うがなァ。」

「なんでそんな事を教えてくれるのかな～まっ、いいや。有り難く終わらせ…「そンな事させると思ってンのか」…！？」

幽汽は見えない壁に押し飛ばされ、吹っ飛ぶ。

「ぐっ……」

「ふっ……俺が…「いや、俺が行く」……どうしてなんだ。」

「何となく……戦わなければならない気がして……」

「ふっ……分かった。」

「気ぃつけてなぁ。水樹君。」

「ああ」

『ＧＥＡＲ』

「変身」

『ＧＥＡＲ！』

水樹はギアスに変身する。

「ようやく来たな。」

「手出さなくていいのに。」

「こっからは、俺がやる。少し休んでろ。」

「ぐっ……本当はやだけど、今回はお言葉に甘えて。」

幽汽は少し後退し、ギアスに任せた。

「さぁどうした？　お得意のシールド攻撃はしないのか？」

「ふぅ～。いや、俺は基本的にこの能力で戦うって事は滅多に無いからな。」

「じゃあ、どうやって…」

「コイツを使ってな。」

七瀬は制服のズボンのポケットから、メモリを取り出した。

『ＣＯＲＥ』

そのメモリの音声を聞いた海堂は、

「コアだと！？」

「どないしたん？海堂君？」

「あのメモリは……」

海堂が説明しようとした瞬間、

「変…身…！」

七瀬とメモリが宙に浮いたかと思うと、七瀬の体が炎に包まれ、巨大な炎の巨人になった。

「お前は……何者だ…！？」

ギアスは巨人に問いただす。

「なんなんや、あれ！？」

はやては海堂に問いただす。

「あいつは……」

「俺の名は……」

「「仮面ライダー……」」

「「コア……！」」

核壁の兄弟（後書き）

感想・ご指摘・質問お願いします。

水樹達の戦い。（前書き）

グダグダで仕方がない……

では、どうぞ……

水樹達の戦い。

「仮面ライダー……コア……？」

「ああ、そうか。あんたは知らないんだよな。コイツは仮面ライダーコア。　いままでの過去の仮面ライダーの記憶を収めた仮面ライダーだ。」

「過去の……記憶？」

「過去と言っても、大半が負の感情が大半だかな。そいつをガイアメモリ化させた。」

ギアスはコアを見て思った。

怖い……

「まっ、それなりに強いがな！！」

「はっ！？　しまっ……がぁあ！！」

ギアスはコアの巨大な足に蹴り飛ばされた。

「ぐっ……くそっ……強い……」

「そうだろう。だが、まだまだこんなもんじゃ無いぞ。そらよ。」

コアは緑色の光線をギアス目掛けて放った。

「なぁぁぁぁ！！」

ギアスは再び、吹き飛ばされる。

「ふん。まっ、変身して間もないからな。」

と言いつつ、ギアスを巨大な手で握り締める。

「ぐぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「もう見てらんない。手出させてもらうよ。」

「ふっ……同感だ！！」

海堂はディエンドに変身し、幽汽と共にコアに向かって行く。

「ふん。邪魔だ。」

コアはギアスをディエンド等に向けて投げつけた。

「ぐぁ！！」

「なぁぁ！！」

「ヴッ！！」

3人は怯んでしまう。

「弱いな。手傷くらいは負ってもいいのにな。」

「強すぎる……」

「どうすれば…「退けよ」…はあ！？」

「ふっ……どういうつもりだ。何の得がある？」

ディエンドは、傷ついた体を両足で支えながら、質問した。

「無い。」

「じゃあなんで…」

幽汽も同じく質問した。

「強いて言うならば……退屈凌ぎだ。退くなら退けよ。また戦いたければ、ここに来い。いつでも待っている。俺に手傷を負わせられば、出て行ってやる。」

コアは光に包まれ、元の七瀬の姿に戻る。

ギアス達3人も変身を解除するが、水樹は今までのダメージに耐えきれず、倒れてしまう。

「「水樹！！／水樹君！！」」

「くそっ……うっ……」

水樹は意識を失う。

水樹は前に夢で見た黒い空間にいた。

「起きなさい。水樹。」

「くっ……誰……だ……？」

水樹は朦朧とした意識の中で、女性に質問した。

「はじめまして…かしら？　私の名前は、烏夜（うや）。”水樹　烏夜”」

「水樹……烏夜？」

だいぶ意識がはっきりして来た水樹は、立ち上がり、女性の名前、烏夜の名前を呼んだ。

「そう。私はあなたの中に存在する、もう一人のあなた。」

「だいぶと言っていいほど、似てないな。」

「まあ、私もそう思う。」

水樹の意見に烏夜は同感する。

「しかし、俺には兄姉はいるが、あんたみたいな人は知らない。もう一人の俺といったな。それも信用出来ない。」

「本当にそう思ってるの？」

「ああ、第一そんな事…「あなたは水城　奈々に好意を抱いている、

違う？」…！？　ばっ……違う！！」

「顔が真っ赤になってるけど？」

「うるさい！！」

図星である。

「黙れ！！」

「何コントしてんの？」

「違う！！これは……」

「まっ、いいけど。それよりも、私の用件聞いてくれる？」

「ん。ああ、何の用件だ？」

水樹は烏夜に用件を聞いた。　烏夜は、にっこりと答えた。

「あなたの体を貰いたいの。」

「……何の冗談だ……」

「冗談じゃ無いの。せっかくあなたのそっくりさんの力と、あなたの歯車の力で生まれたのに、体が無くちゃ存在する意味無いでしょ。」

と言いつつ、烏夜は懐から、あるものことを取り出す。

それは……

「俺のドライバー！？　どうして！？」

「ちょっとあなたが寝ている時に拝借させてもらったの。ついでにこれもね。」

と言い、ギアメモリを見せる。

「くそっ！　返せ！！」

「嫌よ。これから私の物になるんだから。ついでにあなたもね。」

『ＧＥＡＲ』

「変、身」

『ＧＥＡＲ！』

烏夜はギアス（以降、烏ギアス）に変身し、水樹に迫る。

「さっ、いただくとしますか。」

と言い、水樹の首もとに手を伸ばす。

「くっ…ぬぅあ！」

水樹は烏ギアスに首を掴まれる。

「ぐっ……がぁ……」

「安心して。すぐに済むから。」

と言った瞬間、水樹の体が光り始めた。

「！？　なんだ！？」

水樹は驚き、慌てて体を動かす。

偶然その手が烏ギアスのベルトに当たる。

「ぐっ……何？……急に体が……なぁっ！！」

急に変身が解け、烏夜の姿に戻る。

「くっ……やっぱりかぁ。」

烏夜が隙を見せた時、

（っ！今だ！！）

水樹は烏夜に突っ込み、ドライバーとメモリを奪い返す。

「どうやら、メモリはあんたのことが気に入らないみたいだな。」

「そうみたいね。まあいいわ。」

「やけに素直だな。」

「少しは、いい子にしてないとね。まだ体は、あなたのものだから。」

「？　どういう意味か分からないが、やな言い方だな。お前はどうやって生まれた？誰があんたを……その……」

「作ろうとしたか？」

「……まあ、そうだ。誰なんだ？」

そう聞くと、周りが白く光り始めた。

「七瀬……水樹……だけど。じゃあね。いつかその体、頂くからね。」

烏夜がそう言うと、辺り一面が真っ白に光った。

「はっ！？はぁ……はぁ…はぁ……」

「起きたか、大丈夫か？」

「汗びっしょりやで。」

「ああ、大丈夫だ……どれくらい寝てた？」

水樹の質問にソラが答える。

「一週間。まるで死んだように寝てた。まっ、死んだら私が送ってあげるけど。」

「冗談はよしてくれ。」

そんなたわいもない会話をしていると、水樹は寝ていた椅子から立ち上がり、ある事を思い出した。

「あいつは……コアは何処にいる？」

水樹は全員に質問した。

「まだあの場所にいる。」

「なら…「行かんほうがええ」……！？なんで？」

「水樹君、前の戦いのダメージがまだ残っとるやろ。まだ動かん方がええ。」

「はやて、嬉しいが俺は行く。」

「あかん！まだ十分に戦える体ちゃう！」

「それでも……俺は行く。何故だか俺の体が行けって言ってる気がするんだ。」

水樹は、はやてを凝視し、話す。

「せやけど…「あの場所の近くに止まってるよ。」……ソラさん……」

「ソラ…さん。済まない……！」

水樹は、幽霊列車から勢いよい降りた。

「少し……やりすぎたっけな？」

七瀬は、戦った水樹を心配していた。

「でもまあ、兄さんなら絶対に死なないだろうな。」

そう言っていると、水樹は後ろから、声をかけて来た。

「戻って来たぞ。七瀬いや、仮面ライダーコア。」

「来たか。怖じ気づいて来ないと思ってた。」

『ＣＯＲＥ』

『ＧＥＡＲ』

「まさか。そんな訳無いだろ。」

「「変身」」

『ＧＥＡＲ！』

２人はそれぞれの仮面ライダーに変身した。１人はギアス。もう１人はコア。

「「いくぞ！」」

ギアスはコアに向かって、走った。

「うおぉぉぉぉぉぉぉ！！」

「ふん！！」

コアはギアスを蹴り飛ばそうとする。

「うぉっと！？　同じ手が。」

ギアスはかわし、

「利くかぁぁぁぁ！！　おりゃぁぁぁぁぁ！！」
コアに向かって、殴り込む。
「ぐっ……やるな……」
「まだまだ行けるぜ。」
ギアスは余裕の態勢を見せる。
そんなギアスを見たコアは、
「だいぶ元気いっぱいだな。そういえば、彼女に会ったか？　いい女性だったか？」
「……！？　やっぱりお前が……いつの間に俺の中に入れた？」
「お前を握った時。ちなみに、この会話も聞いている。そうだろう？烏夜？」
『まっ、全部バッチリ丸ぎこえ。』
「……！？　何だ…これは…！？」
水樹は、いきなり頭に響いた聞こえた声に驚く。
「念話だ。テレパシーの一種だ。頭の中で言いたいことを響かせろ。」

水樹は頭の中でイメージしてみた。

『こ…こうか……？』

『なかなか飲み込みが早いな。』

『やるじゃない。』

『ほめられたも、嬉しくないぞ。』

水樹は頭の中で答えた。

『水樹、あなた、怖く無くないの？　あなたの中に入った時に恐怖を感じたの。違う？』

……確かにそうだった。

最初にコアを見たときに怖いという感情が水樹の全身を覆った。

だが、

『確かにそうだった。けど今は、違う！！』

今度は自らの口で話す。

「俺はその恐怖を抱えて戦う！どんな事があろうと、戦う！」

「（ふっ……さすが兄さんだ）……そうか…あんたの仲間も来たみたいだし、少し…力を出すか……」

「えっ……！？」

後ろを振り返ると、そこには幽汽、ディエンド、セットアップ状態のはやてがいた。

「水樹！やけに楽しそうにしているな！」

「混ぜないと、私があの世に連れてって行くよ！」

「水樹君！1人やない！私らがついとる！！」

3人はギアスに向かって、叫んだ。

「（いい仲間を持ったんだな……烏夜、後でお前の世界で。）……ふっ……かかって来い……！」

コアは構える姿勢をとり、念話で烏夜に伝えた。

『（いいけど…何を……？）』

ディエンドはコアに向かって、何度も発砲した。
『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＢＬＡＳＴ』
「食らえ！！」
ディエンドブラストを発動しコアに攻撃する。

「来よ、白銀の風、天よりそそぐ羽矢となれ。」
はやては詠唱を唱え、
「フレーズ・ヴェルグ！」
威力の高い、超長距離砲撃魔法を放った。
「ぐっ……うぉぉぉぉぉ！はあぁぁぁ！！」
コアは２人の攻撃を受けきる。
「やるな……だが、まだまだ！！　食らえ！！」
コアは緑色の光線を放つ。
「ぐあっ！！」
「ああ！！」

ディエンドとはやては攻撃を受け、地面に転がり込んだ。

「くそっ！！」

「やぁあ！！」

幽汽もギアスも直接攻撃に出るが、

「甘い！！」

「「ぬぅあっ！！」」

コアになぎ払われる。

「拉致があかないな……全員自分の必殺技を出せ。」

「「「「っ！？」」」」

「あんた達の力を……俺は知りたいからな……」

コアは地面に倒れた４人に向かって、言った。

「なんや突然？なんで……そないな事するんや？」

はやては、立ち上がりながら、言った。

「でも……お言葉に甘えさせて……」

幽汽も立ち上がり、言った。

「ふっ……行かせて…」

「やらせてもらう！！」

ディエンドとギアスも言った。

「……来い！！」

コアはパンチの態勢に入り、右手を真っ赤に燃やす。

『Ｆｕｌｌ　ｃｈａｒｇｅ』

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＤＩ　ＤＩ　ＤＩ　ＤＩ　ＥＮＤ！』

「響け、終焉の笛！」

「「はっ！！」」

「ラグナロク！！」

３人は自らの必殺技をコアに向けて繰り出す。

「ふんっ！！」

コアは必殺技を自らの拳で相殺させる。

「ぬぅ〜〜はあっ！！！」

コアは3人の必殺技を打ち消した。

「どうした……こんなものか？」

『ＧＥＡＲ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ！』

「下だ！！コア！！！」

ギアスは腕を回し、飛び上がり、アッパーを食らわす。

「何！」

「ギアストライク！！」

コアの腹に必殺技のアッパー、ギアストライクを叩き込む。

「うぉぉぉぉぉぉぉ！！！ずぁらぁぁぁぁぁ！！！」

「ぐうぉぉぉぉぉ！！」

ギアスの必殺技を受け、後ろに倒れ込む。

「ぐあっ！！……やるな……」

「どうだ！俺達の力！！さぁ、出て行ってもらおうか。」

「ああ、約束だからな。」

（ほんまに素直やなぁ。逆に怪しいわぁ）

コアは七瀬の姿に戻る。

はやてはそんな七瀬をすこし怪しく思う。

４人は元の姿に戻る。

「ふぅ～やるな。まだまだ強くなりそうだな。特にあんたは。」

七瀬は水樹を指差して言う

「俺を？」

「ああ、そんなあんたにプレゼントだ。」

と言い、七瀬は薙刀状の武器を渡した。

「何だこれは？」

「銃槍”転嵐”（てんらん）だ。疑似メモリ”スピンメモリ”をつけておいている。」

「何故これを？」

「俺を退かせた褒美だ。じゃあな。」

七瀬はどこからともなく、異空間の穴を作り出し、入って消える。

水樹達は幽霊列車の車両の扉の前にいた。

「もう行っちゃうの？」

ソラは3人に問いかける。

「ふっ……ああ。この世界に歯車の気配を感じ無いからな。長居は無用って所だ」

海堂はソラに答えた。

「寂しくなるな。」

「そないな事無いて。また入って来てええよ」

骨丸とはやては、たわいもない会話をする。

「あんた達には世話になった。本当に感謝している。俺も大きく成長した気がした」

水樹は2人に語りかけた。

「じゃあ、またどこかの世界で」

「ええ。じゃあ。」

「ふっ……それじゃあ、行くぞ」

ソラと水樹は別れを言い、七瀬は扉に向かって、詠唱を言い、扉を開ける。

「待たな！！」

「また何時か！！」

「さらばだ！！」

「じゃあね！！」

「またどこかで……ふっ……」

それぞれ最後の別れを言い、水樹達3人はこの世界から消えた。

水樹達の戦い。（後書き）

出来る限り、返信を送るよう努力します。

感想待っています。

人物紹介ｖｅｒＵ（前書き）

幽汽の世界で登場した主要人物です。

慎二はまたいずれ。

人物紹介ｖｅｒＵ

・ソラ

・年齢　２０歳

・身長　１７９？

・体重　６５？

・容姿　『とある魔術の禁書目録』の番外個体（ミサカワースト）に似ているが、比較的髪が長い。

・ＣＶ　坂本　真綾

・幽霊列車の乗組員。仮面ライダー幽汽：ハイジャックフォームに変身する。他人に対して少しタメ語を使用する。番外個体に性格が似ているが、悪どい性格が少し薄い。骨丸には、手厳しい。

・骨丸　（こつまる）

・容姿　白い柴犬で、周りに骨のオーラが出ている。

・ＣＶ　中田　譲治

・幽霊列車の乗組員にして、一応オーナー。仮面ライダー幽汽：スカルフォームに変身するが、他人の体が必要なので、変身する時は、適当にいた人に乗り移って変身する。がしかし、あまり変身する機

会は無い。ソラにいつも手厳しく扱われている。幽霊列車は誰か１人いなければならないので、基本的に列車にいる。

・七瀬　水樹　（ななせ　みずき）

・容姿、体重、年齢、共に同じ。

・補助計画《七人の兄弟達》で生まれた個体。その中での最上位個体。”コアメモリ”で仮面ライダーコアに変身する。《ややネタバレ》”とある魔術”の世界で育ったので、超能力が使える。能力は大能力者（レベル４）の拒絶防壁（リジェクト・アウト）《暗闇の五月計画》に参加しており、口調が変わる。内容は、３６０度方向に透明な壁を発生させ、弾く能力。但し、強力な力を受けると、破壊されてしまう。発生距離は７７ｍ
水樹　烏夜を作り出した人物。水樹を兄と呼び、何故か助ける素振りを見せる。平野の命令以外に独自の計画を持っている。

水樹　烏夜　（みずき　かや）

・身長、年齢　水樹と同じ

・体重　６７？

・容姿　『インフィニット・ストラトス』の”Ｍ”（織斑マドカ）にほぼそっくり。

・CV　豊口　めぐみ

・水樹　聡の中に存在する、もう1人の存在。一応仮面ライダーギアスに変身できるが、メモリに認めらんない限り、変身出来ない。自身の世界で水樹の存在を乗っ取ろうとした。
七瀬、水樹間で、念話が可能。
七瀬とは、水樹に内緒で念話が出来、七瀬の計画に協力している。
《ややネタバレ》独自に三本のメモリを持っている。

コアメモリ

仮面ライダーコアの記憶を宿したメモリ。
純正型で真っ赤なメモリ。

銃槍　《転嵐》

ギアスの専用武器。薙刀モードとライフルモードがある。スピンメモリを使用する事で、メモリブレイクが可能。ライフルモードは薙刀モードの刃を着脱可能。

スピンメモリ

転嵐専用のメモリ。ドリル、チェーン、ソー、の3つの機能がある。

必殺技は
『転一閃』
『スピンスナイプ』

人物紹介ｖｅｒＵ（後書き）

感想・質問・ご指摘お願いします。

Ｗｉｎｄｓ　Ａｃｃｅｌ　Ｗｏｒｌｄ　～加速する海風の世界～（前書き）

個人的に出してみたかった世界でもあり、仮面ライダーでもあります。

それでは、どうぞ……

しかしグダグダ……

３人は、海堂の固有世界にいた。

「ソラさんと骨丸はどないなったんやろうなぁ～」

「まっ、あの２人はあんな感じで自分達の仕事をこなしているんだろうな。ははっ。」

「やろうなぁ～～でも、骨丸は大変やろうなぁ～～少し心配やわ～～」

海堂とはやては、先程の世界の行方を想像した話をしていた。

只、この会話の片隅で、

「……」

水樹は考え事をしていた。

「ん？どないしたん？水樹君？そないな顔して？」

「いや……あの七瀬って言う奴がどうしても悪い奴には見えなくて……武器を渡すなんて……」

「確かに……七瀬って人は、何がしたかったんやろうなぁ～？」

「確かに…俺もそう思った。」

「……」

3人は七瀬について考えたが、何も思い浮かぶ事が出来なかった。

（何がしたかったんだ？2人には、烏夜の事は一応黙っておこう……何となく……言わない方がいい気がする……）

水樹は烏夜の事は2人には黙っておく事にした。

「ん？そろそろ、次の世界へ行くとするか。」

海堂がそう言うと、突然扉が現れた。

「ああ……そうだな。行こう。」

「次の世界は何やろね～」

3人は扉の前に立った。

「ふっ……では、行こうか。」

海堂は扉を開け放ち、3人は外に出た。

平野は固有世界のラボにいた。
そこには、平野以外に水城と水樹に似たサングラスを掛けた男がいた。

「親父、例の女どうすんだよ？あの”名字持ち”の野郎が連れて来た女をよ。」

「凍結にしようとしていた、実験に使う。丁度この実験に適合する人物だからな。」

「ほぅ～」

「というより、お前は何をこんな所で油を売っているんだ？”六継”（むつき）？」

「さっき歯車を回収してきたとこなんだよ。ちょいと休憩しにきたんだ。いいだろそれくらい。」

「勝手にしてろ。そろそろ実験を始める。休憩が終わったら、早く行け。」

「あいよ。で、何の実験だ？」

「ある仮面ライダーの実験だ。」

「何の？」

「憎しみの仮面ライダーだ。」

と、平野は六継に言った。

「……みっ君……」

「どうやら、ただの空き家みたいだな。」
水樹は開けた扉をもう一度開け、中を確認した。
「服装は……俺とはやては……なんていうか、正装って感じだな。ははっ。」
海堂は服装を見て言う。
「ん？なんやなんや、服になんか入っとるなぁ。……六海高校実習生、八神はやて。……実習生やて！？」
「ん。俺もだ。……教えるのは……苦手なんだよな……くそっ……
…」
海堂とはやては驚きと落胆をする。
「で、俺はブレザーにネクタイって……学生証があるって事は……2人の行く高校の転校生ってところ？」
水樹は大方慣れた格好に落ち着いている。
そんな中、はやてはふと気付く。

「て、ちょっと！なんで海堂君が私と同じ実習生なん？ていうか、なんで大きくなっとるん！？」

そう、海堂は大きくなっていたのだ。　その答えに海堂は、

「実は、俺は結構年いってるんだ。体は、その世界で変わる。黙っていて悪かったな。」

と答える。

「で、あんたはいくつなんだ？」

水樹が質問する。

「ふっ……秘密だ。」

そんなこんなで、３人は六海高校にやってきた。午前中は挨拶を済ませて、クラスの生徒にあれこれと質問の嵐を受けていた。特にはやてと海堂は……

お昼休みを迎え、水樹は教室に、はやてと海堂は職員室にいた。

水樹は偶然見つけた図書室近くのベンチで、１人、行きしに買っておいた昼飯を食べていた。

（はぁ～質問攻めはキツいな。２人は大丈夫か？海堂もはやても格好はいいからな。やっぱり、飯は１人で静かに食うのがいいな。）

水樹はそんな事を思いつつ、昼飯のパンをほうばった。

（そういえば、こんな時にいつも水城の奴がいつもこのひと時を邪魔してたな……）

水樹がそう思うと、

『あら、自分の愛する彼女が心配？』

『ばっ……うるせっ！！お前も邪魔すんな！しかも”最愛の”じゃねぇ！！』

突然の烏夜の出現に動揺する水樹。

『ふーん。あっそ。（結構、動揺してるけど。図星？）』

『てゆうか、何しに出てきた？』

『別に、なーんにも。ただ出たかったからだけど？』

『だったら、引っ込め。昼飯の邪魔すんな。』

『しかたがないなぁ～じゃ。』

と言い、烏夜は引っ込んだ。

（何だったんだあいつ？）

と思い、残ったパンを食べた。

早く食べ終わった水樹は、とりあえず周辺をうろうろしていた。
そして何気なく、図書室に入った。

（ん～やっぱり図書室は静かで落ち着くな～。ん？あいつは……）
ほぼ誰もいないテーブルにひとりの少年がいた。その少年は自分が知らない小説を読んでいた。

「（声をかけてみるか……）なぁ、お前。」

「ん？なんだい？あれ……見かけ無い顔だなぁ……もしかして、転校生？教育実習生と一緒に来たっていう。」

「よく知ってんな。そうだ、水樹　聡だ。よろしく。」

「僕は”宮田　親”（みやた　しん）だ。みんなから親君って呼ばれ続けて、あだ名はシンクって呼ばれてる。シンクって読んでくれ。）

「ああ、よろしくな、シンク。」

水樹とシンクはお互いに握手をした。
その時、

「シンク！」

突然、シンクよりも少し背が高い、青年が現れた。

「どうしたんだ？”ユウ”？もしかして…」

「ああ！出てきた。あのやろう、今度こそ捕まえてやる。」

「じゃあ、僕は準備しておくね。」

「先生には、いつも通り。」

「分かってるって。」

ユウと呼ばれた青年はシンクと何やら水樹に理解できない会話をする。

「じゃあ、行ってくる。」

と言い、ユウは図書室を出て行く。

「彼は、何者なんだ？」

「彼は、”網走（あばしり）　ユウ”。僕の一番の友人で、何でも屋”鳴海屋”の従業員の1人だ。僕もその1人だよ。ちなみに、学校には内緒で。」

「で、あいつは何をしにいったんだ？」

「仕事さ。僕もその準備をするところさ。」

「？ん～～あんまし理解出来ないが、あいつのところへ行ってみる。お前も仕事頑張れよ！」

と言い、水樹は図書室を出て行き、ユウの後を追って行った。

「あっ！ちょっと！……少し……面倒な事が起こりそうだな……」

と言い、シンクは呟いた。

ユウは街の広場にいたであろう怪人の前にいた。

「やっと見つけた！おとなしく捕まれ！　ラブドーパント！」

「またてめぇか！誰が捕まるか！折角手に入れたこの力、こいつで俺様の願いを叶えるんだ！邪魔すんじゃねぇよ！」

ラブドーパントはユウに向かって怒鳴る。

「うるせっ！知るか！そのせいで、この島が悲しんでいるんだ！嫌でも邪魔するぜ！」

「ええい！黙れ！てめぇから消してやる！」

そう言われると、ユウは懐から、ロストドライバーに酷似した物を取り出す。

「（おやっさんも出かけてるし、エクストリームもまだ使いこなせてない……けど、行くぞ）どうかな、シンク！行くぞ！」

『ＡＣＣＥＬ』

丁度その頃、水樹は広場の近くでユウを見つけた。

（怪人！？　あいつ何してんだ！）

水樹がそう思った時、ユウはドライバーを巻いた。

（ロストドライバー？いや、でも違う。何だあれは？メモリの差込

口が２つある……）

シンクは男子トイレの座席便所に座っていた。

（だいぶ、この場所にも慣れたな……）

と思っていると、シンクの腰に、先程ユウが装着したドライバーが現れた。

「ふう……いくよ、ユウ。」

と言い、シンクは緑色のメモリを取り出した。

『ＣＹＣＬＯＮＥ』

ユウとシンクは同時に叫ぶ。

「「変身！」」

と言い、シンクは右側にあるスロットにメモリを差し込む。　すると、メモリは消え、ユウの持つドライバーと同じ所に転送される。

ユウはメモリを差し込み、自身のメモリを左側のスロットに差し込み、両側にスロットを開く。

『ＣＹＣＬＯＮＥ・ＡＣＣＥＬ！』

軽快な音楽とエンジン音が鳴り響き、ユウの姿は右側が緑、左側が赤で、青い複眼の戦士に変わっていった。

「きたな……仮面ライダー……W……！」

ユウはラブドーパントの言った、仮面ライダーWに変身していた。

『「さぁ！振り切るぞ！！」』

と言い、左手を差し出し、左に払った。

Winds Accel World ～加速する海風の世界～（後書き）

感想・質問・ご指摘お願いします。

Skull entrance ／ WとGと、時々S ／ six meet

むぅ……　グダグダ……

ど……どうぞ……

Skull entrance ／ WとGと、時々S ／ six meet

「仮面ライダー……W…」

水樹はWを見て驚く。自分以外にメモリを使った戦士がいるとは、あまり思っていなかったからである。

「あいつも……メモリの戦士だったのか……」

『ユウ、また奴らが来るかもしれない。注意しないと。』

「分かってるって、シンク。とりあえず、まずはこいつを捕まる事が優先だ。」

『エクストリームは？』

「使わない……あの力は……俺達には、まだ使いこなせない……」

『分かった。僕のメモリで対処しよう。』

Wは、ユウの体をベースにシンクの意識を取り込んでいるので、端

から見れば、独り言に見えるようだが、２人で会話をしているのだ。
「無視してんじゃねぇよ！」
ラブドーパントは、Ｗに向かってハート型の構成を撃った。
「おっと！アブねぇ。」
Ｗは寸前でかわす。
『ねぇ、ユウ。エンジンブレードは持ってきたの？』
「……わりぃ、忘れた。こいつを思うと、カッとなっちまちって。」
『ふぅ～　相変わらずだね。』
「悪かったな！」
とユウは言い、ドーパントに突っ込んで蹴りを入れる。
「ぐおっ！？」
「まだまだ！」
更に、蹴りを入れ、ドーパントの顔面にパンチを食らわす。
「がはっ！！」
『やはり戦闘能力自体は、そんなに無いみたい。メモリの交換は必

要無さそう。問題なのは、能力ってところだ。』

「ああ、そうだな。おりゃ！」

「ぐおっあっ！」

ドーパントはWの蹴りで吹っ飛ぶ。

「うっし。決めるか。」

と言い、Wは左側のスロットからメモリを取り出し、右腰のスロットに差し込む。

『ＡＣＣＥＬ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ　！』

Wは赤い風と共に、宙に舞い上がる。

『「アクセルエクストリーム！」』

と叫ぶとWの体が正中から真っ二つに分かれ、ラブドーパントに向かって、蹴りを食らわせようとする。

その時、

『「ぐわっ！？」』

突如、Wに向かって、謎の光線が命中。

先程の状態に戻ってしまう

「くっ……来やがったか……」

『どうやら、そのようだね。』

そこには、黒い人型の異形の者が3人いた。

「毎度毎度……お前達……何者だ……」

「……我々は、オルタナティブ・ゼロ部隊。とある世界の技術を応用した部隊だ。」

『ようやく喋ったけど、僕と同じ声だ……』

ソウルサイドのシンクは疑問に思う。

「……行け……」

「いつもいつもわりぃなぁ～。」

と言い、ドーパントは逃走する。

「くそ、待て！ぐっ……！」

「我々が相手だ。」

と、部隊のリーダー格は言い、Wを取り囲んだ。

『今回は、本当にまずい。一度に3体はキツい。』

「くそ……どうすれば……」
Wがピンチと思ったその時

「待て！俺も混ぜろ！」
水樹が囲まれたWの後ろに立っていた。

『君は……水樹……聡君だったよね？何故此処に？』
「さっきシンクが一緒にいた奴か、早く逃げろ！」
Wは叫ぶが、
「安心しろよ。俺も戦える。」
と言い、水樹はドライバーを取り出し、ギアメモリを取り出す。
『ＧＥＡＲ』
「ガイアメモリだと！？」
「変身」
『ＧＥＡＲ！』

水樹はギアスに変身して、オルタナティブ部隊（以降、O部隊）を転嵐で払いのけ、Wの後ろにつく。

「大丈夫か？」

『君……仮面ライダーだったのか？』

「ああ、仮面ライダーギアスだ。」

「じゃあギアス。早速でわりぃが、一緒に戦ってくれるか？」

Wはギアスに問う。

「当たり前だ！」

と言い、転嵐を構える。

平野は、先程のラボにいた。　水城の他に今度は、六継とは違う、どこか幼げで、短髪の水樹がいた。

「どうだ、一（いち）？緊張するか？」

「うん！僕がこの実験で強くなるって思うと、わくわくするよ！」
一と呼ばれた少年は元気いっぱいに答えた。
「ふん。じゃあそのドライバーを腰につけろ。」
「うん！」
と言い、一は、先程ユウ達がつけたドライバーを装着した。
すると、水城の腰にも同じドライバーが出現した。
「さて、始めるか。」
と言い、平野は水城に緑色のメモリを握らせ、起動させた。
『ＣＹＣＬＯＮＥ』
「うん！」
『ＡＣＣＥＬ』
一はメモリを起動し、水城を抱きかかえた。
「お姉ちゃんって綺麗だね。でもこれから僕のものになって、僕の言う通りになるんだよ。変身！」

『ＸＴＲＥＡＭ！』

ギアスとＷはＯ部隊と五分五分の戦いを繰り広げていた。

「くそ、しぶといな。」

『ああ、１人１人に力がある。』

「３対２だからな、シンク、行けるか？」

『もちろん。』

ギアスとＷは再び、構える。

一方、Ｏ部隊も自らの剣を構える。

『「「来る！」」』

2人……いや、3人が思った瞬間、O部隊が一斉に仕掛けてきた。

その時、

「「「ぐはっ！？」」」

突然O部隊は何者かに狙撃され倒れる。

「…？　何だ……一体？」

『もしかして……』

「この銃撃は……」

そこには、髑髏を模し、白い帽子を被り、特殊な銃を持った戦士がいた。

「よう、遅くなって悪かったな。」

『「おやっさん！／ソウキチさん！」』

「おいおい……どちらかに合わせろ……俺が困る……」

『「す……すみません…」』

「そこは合うのかよ……」

「だ……誰なんだ、あの人は？」

ギアスはWに質問する。

『あの人は、鳴海ソウキチ。僕達が働く鳴海屋の主で…』

「俺達の師匠だ。」

「くっ……一旦退くぞ……」

と言い、O部隊は逃走する

それを見たWは、追走しようとする。

「よせ、２人共。深追いは禁物だ。」

と言い、３体の戦士は変身を解除した。

「む、君は誰だ？」

ソウキチは水樹に問う。

「あっ……俺は水樹　聡と言います。彼と同じ、高校の転入生で…俺も……仮面ライダーです。」

水樹は答える。

「そうか。まあ、メモリを使った姿だからな。ユウ、学校が終わったら……」

「すぐに来いだろ。分かってるって。シンクにも、伝えておくから。」

「ああ。水樹…だったな。君も後でユウについて行ってくれ。」

「分かりました。」

その頃、シンクはというと……

「ふぅ～。　ソウキチさんが来て助かったなぁ。さて、ユウを待つか。」

ガチャ

トイレの便器のドアを開けた瞬間、シンクは、あ然とした。

「ふっ……待ってたぞ。宮田　親君。いや、仮面ライダーWの片割れ君。」

「何故…それを？あなたは……？」

「ふっ……どこにでもいる、ただの教育実習生だよ。後で話を聞かせてもらえるかな？」

「……はい……」

「ありがとう。後、俺の連れも一緒に聞かせてもらうな。」

「連れ？」

「ああ、もう1人の実習生だよ。」

そんなこんなで水樹とユウは、学校でシンクと合流。学校での行事を済ませ、はやてと海堂と共に、鳴海屋の事務所で話をする事になった。

「おやっさん。来たぜ。水樹の仲間も一緒だけど、大丈夫だよな？」

ユウは開けた途端に、椅子に座って書類整理をしているソウキチに向かって、言った。

「大丈夫だ。あんたらは水樹君の仲間なのか？」

「君はいいですよ。」

「そうか。分かった。で、どうなんだ？」

ソウキチは質問する。

「ええ、海堂　葵です。先に言っておきますが、俺も仮面ライダーです。別世界の。」

ソウキチは驚く。

「ほう、そうなのか！？　で、そちらのお嬢さんは？」

「お嬢さんって……そないな……照れますよ……♪」

そんな照れるはやてを水樹は、

「そうか？お嬢さんには程遠いとは、思うけどな。」

「やっかましいわ！！！」

パシーン！！　と、綺麗な音と共に、水樹は、はやての平手打ちを食らった。

「あがっ！！？　てめぇ！なにすんだよ！！」

「なんや！！　女性に対して失礼やろ！！　しかもてめぇってなんや！？　水樹君年下やろ！！」

「んだと！！」

「んっん……おい、水樹、はやて……すこし場をわきまえろ。」

「「ご……ごめんなさい……」」

「で、君の名前は？」

「あっ、はい。八神はやてです。」

「君も、仮面ライダーなのか？」

「あっ、いえ。信じられへんと思いますが、実は……魔導師なんです。」

「魔導師！？　てことは、魔法使い！？」

ユウは驚く。

「はい。でも、皆さんの知ってる魔法使いとは、すこし違うんです。」

と言い、はやては自分の世界の魔導師について説明した。

「へぇ～魔導師ってのは、ファンタジーなものかと思ってたけど、君のはすこし科学的要素があるんだね。すこし興味が湧いてきたよ。」

とシンクは言い、目を閉じようとする。

「だぁー！！シンク！今”検索”するのは止めとけ！」

とユウは言い、シンクの行動を制した。

「そう言えば、自己紹介がまだだったな。俺は鳴海ソウキチ。この事務所の所長だ。」

「改めて言うな。網走　ユウだ。この事務所で働いている。水樹、お前と同じ仮面ライダーだ。」

「ああ。確か、仮面ライダーWだっけ？」

「ああ。」

ユウは答える。

「次は僕の番だね。僕は、宮田　親。シンクって呼んでくれ。僕もユウと同じく仮面ライダーWだよ。」

「ん？シンク君も、ってどういう事なん？」

「仮面ライダーWってのは俺とシンクの”２人で１人の仮面ライダー”なんだ。俺の体をベースにシンクの意識を取り込んで変身するんだ。ダブルドライバーって言う、ロストドライバーの差込口が２つある装置でな。」

「へぇ～そうなんや～」

「シンク君って……まあ、いいや。」

「で、ソウキチさんも仮面ライダーでしたけど。」

と水樹はソウキチに質問する。

「ああ。あれは仮面ライダースカルだ。ロストドライバーにスカルメモリを差し込んで変身する。」

「スカルか。生きてるなんて珍しいな。」

「ん？なんか言ったか。」

「ふっ……何でもありませんよ。」

海堂は、答える。

「で、水樹。お前もメモリを使って変身してたけど、あれは？」
「それは……えー……あー……」
「ふっ……それは、俺が答えよう。」
と言い、海堂はギアスとディエンドについて、説明した。

「ほう、俺達の世界と異なる世界の仮面ライダーか。あまり想像した事はなかったな。」
「確かに。俺も想像しなかったぜ。」
ユウとソウキチは揃って、驚く。
その片隅でシンクは、
「ユウ！ソウキチさん！さっき検索してみたんだけど…」
「シンク、また勝手に検索を……で、どうだった？」
「この世界の存在ではないからかな、引っかからなかった。」

「そうか。」

ソウキチは頷く。

「あの～なんや言うてますけど、検索って何ですか？」

はやては疑問に思う。

「検索ってのは、僕が物心ついた頃から出来たんだけど、僕は地球(ほし)の本棚って言う、地球の記憶が詰まったアカシックレコードから、様々な情報を引き出す事が出来るんだ。」

「ひぇ～そんな凄い事出来るんや！！凄いなぁ～！」

「でも、キーワードに引っかからないと駄目で、いくつかキーワードが必要なんだ。」

そう答えるシンクを、

「……」

海堂は、静かにシンクを見つめていた。

Skull entrance ／ WとGと、時々S ／ six meet

親君の声は、御察しの通りの人物です。
ソウキチさんは、正史と同じです。

感想待ってます。

はやて「そういえば、作者さんは、ロリコンなん？」

作者「いや、逆に年上辺りがいいですわ～」

「地球の本棚って言ったな。いつ頃から使い始めたんだ？」

海堂はシンクに質問する。

「うーん……僕がユウと初めてWに変身して数日後かな。なんとなく、考え事してた時になった。…そういえば、僕が寝ている時に泥棒が入ったっけなぁ……何も盗まなかったらしいけど、ちょうど水樹君と同じ位の人だったっけなぁ……」

「君はよしてくれ。水樹でいい。」

「あっ、ごめん。じゃあそうするよ。」

「で、3人は何故この世界にいるんだ？あの黒い奴らと何か関係があるのか？」

ソウキチは海堂に質問する。

「ええ。奴らは恐らく、俺が所属している組織を抜け出した仲間の部下だと思います。あのO部隊も別世界の仮面ライダーで、その技術を応用・量産化したと思います。」

「そいつらの目的は？」

「まだ何も。とりあえず、俺は奴の……平野　蓮の確保が目的なんです。水樹とはやては、平野に世界を破壊されて、しかも水樹は、

彼女を連れ去って行かれたんです。で、協力してもらっているんです。」

「なるほど……大変だったんだな。」

「まあ、それなりに……そういえば、あの…ドーパントっちゅうんしたっけ？あいつは何者なんですか？」

はやては、答えて質問する。

「ああ。あいつはラブドーパント。愛の記憶を収めたラブメモリって言うガイアメモリを使った怪人だ。ここからは、ユウに聞いたら分かりやすいだろう。」

ソウキチは答える。

「すこしこの島の説明を含めて説明するな。最近この人工島、六海島でカップルや夫婦の女性が男性を殺害する事件が多発してるんだ。十中八九、ドーパントだったんだけどな。」

「で、そのラブドーパントの能力は何なんや？」

「対象の女性の愛する気持ちを最大限に高めて、他の女性に対して敏感にして、……何というか……ヤンデレって言ったら分かるか？」

「「「あー……分かる分かる……」」」

3人揃って言う。

「そうして、事件が起こる。で、俺達Wが対処するんだけど……」

「あいつらが邪魔している、か……」

水樹が先を言う。

「ああ。あいつに会ったのは4回目だ。一体何が目的なんだ……
あーっ！分からねー！」

ユウは頭を抱える。
その時、海堂は、シンクに向かって言う。

「……なあ、シンク。水樹に触れて、本棚に入ってくれないか？」

「え？ああ、うん。水樹、来て。」

「ああ、……？」

と言われ、水樹は、シンクの手を握った。
シンクは検索の体勢に入る。

「それじゃあ、行くよ。」

と言って、2人は目を閉じ、本棚に入った。

「んっん……ここは……？」

「あれ！？　どうして水樹がここにいるの！？」

「シンク、どうした？……ここはどこなんだ？」

「ここは……地球の本棚だよ……でもおかしいな……普通は僕しかはいれない筈なのに……」

シンクは首を傾げる。

その時、

『おーい。シンクー。そっちの状態はどうなってんだ？』

ユウの声が空間に響いた。

「大丈夫だけど、水樹まで来ているんだ。」

『はあ！？　どうなってんだよ？なんで…『シンク、検索だ。キーワードは水樹　聡。』てちょっと！』

海堂がユウの会話に割り込んでキーワードを伝えた。

「えっ！？　ああ…うん。分かった。キーワードは……”水樹　聡”」

とシンクが言うと、一冊の本が現れた。

「えっ！？　どうして！さっきは出てこなかったのに……」

『（やっぱり…）シンク、戻ってくれ。多分、奴らの目的が分かった。』

「「なんだって？」」

「で、どうだったんだ、海堂」

水樹は尋ねる。

「水樹、シンク、驚かないでほしいが、シンクは水樹と同じ、歯車を体内に持っている。」

「「なんだと！？　／　なんやって！？」」

「あのさぁ、俺達にも説明してくれねぇか？こっちは訳が分からなくて……」

「確かに、ユウの言った通りだ。歯車とは何なんだ？」

ソウキチとユウと海堂に尋ねる。

「歯車って言うのは、多くの世界に存在する、世界を動かす宝だ。色々種類があってな、どうやらシンクは”地球の本棚”の力が宿っているみたいだな。」

「そ、そうなのか……シンク、お前すげーもん持ってたんだな。」

「う、うん……」

シンクは驚きを隠せずにいた。

「ただし、破壊されたり、無理やり世界から抜いたら、世界は静かに消えていく。」

海堂が言うと、周りは静寂に包まれる。

「一旦休憩時間としようか。長くなりそうだ。」

ソウキチは静寂を破り、皆に休憩を伝えた。

「そういえば、俺の歯車の力は何なんだ？」

水樹は海堂に質問する。

「ふっ……またいつか話す。すこし、内容が大きいからな。」

と、海堂は返答した。

「話を戻すが、平野と言う奴は、歯車を集めて何かをしようとしている。そう言いたいんだな。」

ソウキチは言う。

「ええ。しかも奴には、7人の幹部がいて、そいつらが主に行動を。」

海堂が言ったその時、ソウキチの懐から携帯電話の形をした物が鳴り、取り出し、出た。

「もしもし俺だ。ん！また出たのか！！　で、まさかあのメモリを使うのか？まだ未完成なんだろう。試すのか？……分かった。俺達もすぐに行く。」

と言い、ソウキチは電話を切った。

「なんだって、おやっさん？」

「ミコトの奴、あのメモリを使うらしい。」

「まじかよ。チャレンジャーだなーあの人。」

「すんまへんけど、ミコトって誰の事でっか？」

はやての質問にシンクが答える。

「ミコトってのは、大道（だいどう）　ミコトって言う情報屋の1人でダブルドライバーとか作ってくれた人なんだ。」

「へぇー凄いなぁ。」

「で、その人がどないしたん？」

はやては質問する。

「ミコトさん、自身のドライバーとメモリを作ってたんだ。でもなかなか上手くいかなくて……大丈夫かな？」

「とりあえず、行くぞ。３人も一緒に。」

ソウキチは全員を促す。

「また俺様の餌食になる女がやって来やがったなぁ～～馬鹿な女だぜ。」

ラブドーパントは、目の前の女性に向かって言う。

「ふん！このミコトさん向かってに馬鹿って言うのは、自殺行為に近いんだけどねぇ～」

この女性、大道　ミコトはラブドーパントに向かって、言う。

「はっ！ただの女に何が出来んのかな～？」

「本当にただの女かな～？」

と言い、ミコトは白いメモリを取り出した。
その時、

「ミコト、来たぞ。色々と人を連れて来たけどな。」

ソウキチはミコト向かって言う。

「おーいいなー。初使用だから、ギャラリーは多い方がいい。」

と言い、ミコトはロストドライバーを装着する。そしてメモリを起動する。

『ＥＴＥＲＮＡＬ』

「変身！」

『ＥＴＥＲＮＡＬ！』

軽快な音楽が流れ、ミコトは、黒いマントに青と白いの姿をした戦士に変わっていた。

「仮面ライダー……エターナル！」

そんなエターナルを見て、海堂は、

（この世界……珍しいな……）

と思った。

「おっしゃぁ！！　んじゃ、行かせてもらうよ！！」

エターナルはラブドーパントに突っ込んでいった。

どこかの真っ白な空間のラボにO部隊のリーダー格だった男と椅子に座って、水樹にやや似た女性がいた。

「いかがなさいましたか、”四鳳（しほ）様”？」

O部隊のリーダー格の男は、四鳳と呼ばれた女性は、椅子から立ち上がって、言った。

「そろそろあの子に会ってもいいんじゃ無いかと思ってね。丁度あのギアスって奴も来てるようだし。連絡よ。それに、変身を解いたらどう。部隊長？」

「かしこまりました。」

と言い、部隊長は変身を解いた。
その容姿は、シンクにほぼ似ていた。違うとしたら、体格である。
「うーん……やっぱり本物とは違うねぇ……会いたいなぁ……あの子の欲望って何なのかしら？」
と言い、四鳳は部隊長に近づく。
「四鳳様……またですか？……もう勘弁してくださいよ……」
「だーめ。あなたは変わりなんだから。いただきま～す♪」
と言い、
「うっ！…まっ！……ん……うーん……／／」
四鳳は部隊長にキスをした。
必死に抵抗する部隊長だが、何故か次第に受け入れるようになっていく。
「ん……ぷっふぁ！！　やっぱり飽きないわね～　でも、あの子はどんな味なのかしら？」
（四鳳様……勘弁してください……）
「じゃ、行こうか。」
四鳳は部隊長と共にラボを出た。

「おりゃ！」

エターナルは、ラブドーパントをぶん殴った。

「ぐぁっ！！」

「まーだまだ！おりゃ！」

エターナルは持っていたナイフ、エターナルエッジを使ってラブドーパントを切り裂いた。

「がっ！！くそっ……」

「じゃ、とどめと行こうか。シンクー、メモリ貸して。出来ればヒートメモリで。」

「なんでですか？自身のエターナルメモリで…「そこはまだ不安定だから。」全く……投げますよ。はいっ。」

エターナルはシンクの投げたヒートメモリを受け取る。

『ＨＥＡＴ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ！』

「ヒート、エターナルブレイズ……おりゃ！！」

エターナルは右手から青い炎の光線が放出する。

その時、

『ＡＣＣＥＬ　ＶＥＮＴ』

「ぐっ……ぐぁっ！！！」

Ｏ部隊の１人が受け止めるが、耐えきれず爆発する。今回は５人で来たらしい。

「ん？ああ…あんたらが、噂の……ってやべー、すこしオーバーヒートしてきた！」

と言い、変身を解除した。

「うおっ！？あちっあちっ！！…ちょいと休めるか……ソウキチ、後は任すよ。」

「ミコト、すこしは、やるようになったな。後は俺達に任せとけ。行くぞ、ユウ、シンク。」

「「ああ！」」

『ＣＹＣＬＯＮＥ』
『ＡＣＣＥＬ』
『ＳＫＵＬＬ』
「海堂、俺達も。」
「ふっ……当たり前だ。はやて、サポートを。」
『ＧＥＡＲ』
『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ　……』
「分かっとる。頑張ってな。」
「「「「「変身！」」」」」
『ＣＹＣＬＯＮＥ・ＡＣＣＥＬ！』
『ＳＫＵＬＬ！』
『ＧＥＡＲ！』
『ＤＩＥＮＤ！』
５人はそれぞれの仮面ライダーに変身した。
『「「「「行くぞ！」」」」』

４人……いや、５人はＯ部隊に突っ込んだ。

部隊長と四鳳はビルの上から戦いを眺めていた。

「高みの見物ってのは、案外悪くないですね。」

「まっ、私は慣れてるけどね。あっ、そうだ！あなたにこれを渡しとくね。」

と言い、四鳳は、あるデッキケースを渡した。

「四鳳様……これは……」

「部隊長特権。あなたは、私のお気に入りなんだから。さっ、行きましょう。あっ、後、今後からは”ラプラス”って呼ぶから。」

「ありがとうございます。で、意味は？」

「特にない。何となく思いつきで。」

「……全く……」

『ＨＥＡＴ・ＡＣＣＥＬ』

「おりゃ！！」

Ｗは、両側のサイドを赤に染め、燃え盛る右手でオルタナディブの１人を殴り飛ばした。

『次はこいつで行こうか。』

『ＬＵＮＡ』

Ｗは、ヒートメモリを抜き、代わりに黄色のルナメモリを差し込む。

『ＬＵＮＡ・ＡＣＣＥＬ』

Wの右半身が黄色に染まる

『はあっ！！』

Wが回し蹴りを繰り出すと、Wの右足は変幻自在に動きオルタナディブに三発、蹴りを入れる。

「ぐぁっ！？」

「さーてと。」

『ＣＹＣＬＯＮＥ・ＡＣＣＥＬ』

「決めるか。」

『ＡＣＣＥＬ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ！』

Wの体が浮き上がり、

『「アクセルエクストリーム！」』

オルタナディブにアクセルエクストリームを繰り出す。

「がっはっ！！」

受けたオルタナディブは、爆発する。

「うっし！」

『やったね。』

「ぐぁっ！！」

「呆気ないな。これで決めさせてもらう。」

スカルは自身のメモリを抜き、自身の銃、スカルマグナムに差し込む。

『ＳＫＵＬＬ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ！』

スカルはマグナムから強力な光弾を撃つ、スカルパニッシャーをオルタナディブに撃ち込む。

「ぐぁっ！！」

オルタナディブは爆発する。

ギアスとディエンドは、お互いに背を向けていた。
ギアスは転嵐をライフルモードにし、スピンメモリを差し込む。

『ＳＰＩＮ』

「一気に決めるぞ。海堂！」

転嵐のトリガーを引く。

『ＳＰＩＮ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ！』

「ふっ……分かってる！」

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ……ＤＩ　ＤＩ　ＤＩ　ＤＩＥＮＤ！』

「「はっ！！」」

ディエンドは青緑色の光線”ディエンドブラスト”を繰り出し、ギアスは、巨大な歯車状のエネルギー体を発射する”スピンスナイプ”を発射する。

「「ぐぁっはっ！！」」

先程と同様に爆発する。

「くっ……に…逃げろ……」

ラブドーパントは逃走を計ろうとするが、

「女の心を弄んだ奴が、逃げ切れると思っとんのか？ああっ！？」

はやてが、鬼の如しに怒っていた。

「なんだてめぇ！？」

「ただの魔導師や！！　覚悟しぃや！」

と言い、はやてはバインドをかける。

「なんだこれ！？」

「これで動けへん……行くで！！！」

はやての足元に魔法陣が現れる。

「来よ、白銀の風。天よりそそぐ羽矢となれ。」

詠唱を終え、

「フレーズ・ヴェルグ！」

フルパワーのフレーズ・ヴェルグを放った。

「ぎゃぁぁぁぁあっ！！」

ラブドーパントは爆発し、普通の一般市民に戻った。傍らには、破損したメモリが落ちてあった。

「ふん！清々したわ！」

と言い、はやては5人の元へと戻った。

はやては、戻って来て唖然とした。

スカル、W、ディエンドは黒い鉄仮面のライダーに苦戦し、

ギアスは、上下3色のライダーになぶり者にされていたからであったからなのだから。

Eternal Braze ／ 動く4th ／ informant ET

水樹「俺はロリコンじゃねえええええええ！！」

感想待っております。

次の世界で、本編絡みの、コラボをするので、
その伏線を兼ねてみました

では、どうぞ。

はやて「ユートピアさん、すまへんなぁ……」

はやてが駆けつける数分前

5人の仮面ライダーは驚いていた。
それはそうだろう。
何せ、シンクにほぼ似た男性が黒い天使の輪に、黒い天使の翼を持った女性と共に、”空から”現れれば、誰もが驚くだろう。

『君は一体……』

「何者なんだ……？」

Wは現れた2人に話す。

『しかも君は僕に瓜二つだ……何者なんだ…？』

シンクサイドは尋ねる。男性は答える。

「私の名前は、ラプラス。この方、四鳳様の直属の隊の部隊長です。シンク様のクローン体であります。」

「私は四鳳。水樹だっけ？あなたのクローン体だけど、ちょっといじくって女性に変えたの。」

「何故空を飛べるんだ？」

スカルは、尋ねる。

それはと言い、

「私は人間からグリードって言う、怪人になったから。」

辺りは沈黙する。その沈黙をディエンドが破る。

「グリードだと……！？　どうやってなった？　何のコアメダルだ？」

「ああ～　それねー。私は”ヒト””テンシ””アクマ”のコアメダルで構成されてんの。勿論、全部私らのオリジナルのコアメダルね。」

四鳳は、軽い感じで答える

「なるほど。あれがお前のグリードとしての姿か。しかしその姿は戦闘向きではないだろう。」

ディエンドは納得しつつ尋ねる。

「へぇ…なかなかいい頭してるねぇ。その通り。あれが私の本来の姿。もっと姿は変えられるけどね。確かに戦闘向きではないけど……」

と言い、四鳳は四角い黒に青いラインのはいった物を腰に装着し、赤、黄、緑のメダルを取り出した。

「そいつは!?　どこで手に入れた!!　有り得ない!!　」

ディエンドは激しく言った。

そんなディエンドに四鳳は、

「有り得ないでしょう?　これ手に入れるのに苦労したんだから。メダルもあまり揃ってないんだよね。」

と言い、四鳳はベルトにメダルを入れて傾ける。　そして、右腰にある丸いスキャナーを起動させる。

「変身!」

スキャナーをメダルにスキャンさせる。

そして、

『タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ！タトバ・タ・ト・バ！』
と低い声が響き、四鳳の体は上下三色の戦士に変身した。
「そんな……馬鹿な……」
ディエンドは後ずさる。
「どうしたんだ海堂！？」
ギアスは尋ねる。
「あれは…「仮面ライダーオーズ」……だ。」
とディエンドの言葉をオーズは割り込んで言った。
「ラプラス。あなたも変身を。」
「かしこまりました。」
と言い、ラプラスはデッキを前にかざす。すると、ラプラスの腰に中央に窪みのあるベルトが出現した。
「ふぅ……変身。」
デッキを窪みに入れ、ラプラスの体は黒い鉄仮面の戦士に変わっていった。
『ラプラス……その姿は……？』

「私の今の姿は……仮面ライダー……リュウガです。一応言っておきますが、私はあなた達と同じ、人間です。御安心を。」

リュウガは会釈し、5人に向かって言った。

「で、何が目的だ！」

ユウサイドは尋ねる。

オーズは答える。

「そーね。シンク。後一応水樹。私の僕（しもべ）になるか、歯車抜き取って死ぬか、どっちがいい？」

2人はすこし怖気が走った。すこし間を空けて答える。

「ふざけてんのか？渡すわけねぇだろ。」

『僕も同意見だ。』

「ふーん。そうなの。私は出来れば前者の方がいいから、ラプラス。いつもの”あれ”でいくから。」

「かしこまりました。では、どちらを？私もリュウガは初めてなので、暴れさせてください。」

「んー……シンクの方がいいんだけど、ややこしいから、仕方がなしに水樹にしておくわ。あっ、一応そのデッキ、オリジナルより中身のカードをすこし種類増やしているから。」

「分かりましたでは……」

「行きましょうか！！」

と言い、リュウガとオーズは5人に向かって突っ込んで行く。

「来る！」

スカルは叫ぶ。

仮面ライダー達は、構える

リュウガは突っ込みながらデッキからカードを抜き、左腕についた”ブラックドラグバイザー”に装填する。

『ＴＲＩＣＫ　ＶＥＮＴ』

低い声と共に、リュウガは3人になった。

『なっ、増えた！！』

「くそっ、ややこしい事しやがって。」

Ｗは言う。

「ふっ……でも、」

「負ける事は無い！」

ディエンドとスカルは繋げて言う。

（リュウガか……なら、試してみるか……）

「水樹！このメモリと入れ替えてみろ。」

と言い、ディエンドはギアスに向かって、メモリを投げ渡す。

「よっと。こいつは……」

『ＲＹＵＫＩ』

「なんだか知らねえが、分かった！」

と言い、ギアメモリを抜き、代わりに渡されたメモリを差し込む。

「変身！」

『ＲＹＵＫＩ！』

ベルトを展開し、ギアスはリュウガを赤く染めた戦士に変身した。

「へー。ギアスってこんな事も出来るんだ。」

「私も情報が少なかったので知りませんでした。」

オーズとリュウガは立ち止まる。

「こ……この姿は……？」

「そいつは”仮面ライダー龍騎”だ。龍騎メモリは、俺が持ってい

たカードをメモリ化されたやつの1つだ。」

「龍騎……（メモリから……色んな情報が入って来る……）」

G龍騎（ギアス龍騎）は自分の姿に驚く。

「けど、変身時間は7分までだ。気をつけろ。」

「分かった……しゃあ！」

G龍騎はオーズに向かって突っ込んでいった。

仮面ライダー同士の異色の戦いが始まった。

どこかの世界。　人間と、白灰色の存在が、共存した世界。

灰色のカーテン状のオーロラが現れて、すぐに消えた。　そこには、

可愛らしい黒髪黒瞳の少女がいた。

「あれ？どこだろう？さっきMと別れたばっかりなのに。」
黒髪の少女は呟いた。
「……公園って所だね。」
そう呟くと後ろから、
「こんな夜中に、こんな所で女の子1人でどうしたんだ？」
と、後ろから男性の声がした。少女は振り返る。
「…誰かしら、あなた？」
少女は男性を見つめて言う
「七瀬　水樹。君と似た者だ。同じクローンで、同じ異世界の存在。はじめまして、亡国機業の”A”。」
「……どうして私の事を知ってるのかなー♪何者かしら？」
Aと呼ばれた少女はニコリと可愛らしく、且つ威圧のある言葉を言う。
「それも含めて、すこしお茶でもしないか？」
七瀬は同じくニコリと返答した。
「いいよ。楽しいお茶になるといいね。ふふふ。」

『ＳＴＲＩＫＥ』

Ｇ龍騎は懐からメモリを取り出し、左腰のスロットに差し込んだ。

『ＲＹＵＫＩ・ＳＴＲＩＫＥ　ＵＰ　ＬＯＲＤ！』

すると、空から龍の頭を模した装甲が右腕に装着した。

「はぁ……」

Ｇ龍騎は右腕をオーズに向けて構え、

「はあっ！！」

装甲から火炎弾を放出する

しかし、

「よっと。」

バッタコアメダルの力で、跳躍してかわす。そして中央のメダルを青いメダルに交換しスキャンする。

『タカ！ウナギ！バッタ！』

オーズの胴体部分が青く染まり、電気鞭を出現させた。
そして、

「ふんっ！」

と、両腕の鞭をG龍騎の首に巻き付ける。首に電流が流れる。

「あ〝ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」

『「水樹！」』

Wが叫ぶ。

「くそっ、邪魔だな……」

「オーズを撃てない……くそっ、水樹！」

ディエンドが叫ぶ。

「くっ……くそっ……」

時間が断ち、龍騎メモリは強制的に排出される。

「みんな！……っ！？」

丁度、はやてが来るも、光景を見て唖然とする。

「丁度いいゲストが来たみたいね。ふんっ！」
と言い、電気鞭”電気ウナギウィップ”をはやてに向けてしばく。
「がっ！！　くっ……」
はやては、地に平伏す。
G龍騎はメモリが強制的に排出された事により、変身が解除され、水樹の姿に戻る。
「ラプラス！やるからバインド、かけといて。」
「かしこまりました。」
と言い、リュウガは全員に黒いバインドをかける。
「なっ！」
『動けない…』
「くそっ…」
「水樹……！」
「水樹君……」
ライダー達とはやては、拘束され、もがく。

オーズも変身を解き、四鳳の姿に戻る。

「さーてと。よいしょ。」

四鳳は水樹に覆い被さるように抱きつく。

（くっ……なんだ……抵抗しようにも、体が動かない……）

水樹は、抵抗するどころか逆に受け入れるようなっていく。

「いただきまーす？」

と言い、四鳳は水樹にキスをする。

（うっ！？……う……ん……ああっ……）

水樹は、抵抗する意欲を失い、四鳳に抱きつく。

目も虚ろになっていく。

（終わりましたね。四鳳様の”アフロディーテ”と”エロス”の力を秘めた、接吻による魔術。受ける者の抵抗心をなくし、キスをされる事によって相手に心を全て預ける。

そして、行き過ぎた場合は、存在自体をも預ける。

全く恐ろしいですね。グリードでありながら魔術師なんて……）

四鳳の力に改めて恐怖するリュウガは、バインドをかけ続ける。

（水樹君……！！！）

はやてが思ったその時、

「がっ！？　何！？　くそっ…！」

突然、四鳳はキスを止めた。

そして、水樹は立ち上がるが、瞳は真っ赤に発光していた。

「くっ……お前は何者……！？」

四鳳は尋ねる。

「……私は……」

女性混じりの声で言った水樹は、黒い光に包まれ、姿を変えていく。

やがて、光が消えていく。

その姿は……

「私の名前は、水樹　烏夜。よろしくね、泥棒魔術師さん。」

烏夜は、四鳳に向かって威圧的に言った。

先程と同様の世界。　同じように、灰色のオーロラが現れて、消えた。今度は、オレンジ色の長い髪に赤い目の、先程の少女に似た少女がいた。

「あれ？ここ……どこでしょうか？」

少女は、辺りを見渡し、周囲を確認する。

「また…異世界でしょうか……？今度は、私1人のようですが……」

少女は独りごとすが、突然

「がっ！？　ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

突然首筋に電流が走り、気絶する。
その後ろには、黒い装甲のボディに青く光るバイザーを掛けた人型のロボらしき者がいた。

「ふんっ。呆気ない。この音梨　楓という少女が必要なのか？私の為になると言っていたが。」

装甲が左腕のブレスレットに吸収され、女性が現れる。
女性は水樹に似ているが、すこし老け、年齢は３０歳といった姿をしている。
女性は、楓の首に掛けられた、月形の首飾りを丁寧に奪い取る。
《～♪》

女性は、突然鳴ったスマートフォンを取り出す。

「私だ。”サード”だ。……そうか、分かった。すぐに行こう。ついでに私の強化に必要な物を手に入れた。では。」

と、電話を切り、サードは楓を見つめる。

「音梨　楓。いい体をしているな。ふっ…私を楽しませてくれそうだな。ふふふ。」

サードは怪しげに笑い、楓を抱きかかえてその場を去った。

「水樹　烏夜ねぇ～。知らないわねぇ。」

「私も知りません。」

四鳳と変身を解除したラプラスは、烏夜を見つめて言う。　無論ラプラスはバインドを掛けた状態である。

「まぁ知らなくて当然ね。それよりもあんた、私の宿主を奪おうとしたようね。」

烏夜は、四鳳を指差す。

「ええ。そうね。存在を奪っても良かったけど、僕にしようと思ったの。何か問題でも？」

「大ありよ。彼の存在を奪うのは、私なんだから。でもその前に……あなたを潰す方が先決ね。」

と言って、烏夜はドライバーと真っ黒なメモリを取り出す。

「ギアメモリは駄目だったから、このメモリで」

と言い、メモリを起動し、ベルトを装着する。

『ＲＡＶＥＮ』

「変、身！」

『ＲＡＶＥＮ！』

烏夜は、烏を模した真っ黒なライダーに変身した

「あなた……本当に何者……？」

四鳳はオーズドライバーを装着しながら尋ねる。

「仮面ライダー……レイブン！」

「ふんっ……！一番苦労して手に入れた”コイツ”を使うとはねぇ…」

『プテラ！トリケラ！ティラノ！プ・ト・ティラーノ・ザウルース！』

四鳳はオーズ・プトティラコンボに変身する。

女性同士の仮面ライダー同士の戦いが今……始まる。

Over Over Zone "Ryuga"／危険

書いて思ったのですが、なんか何でもアリになって来ているような感じが……

感想待ってます。

Raven stage／勝負にEを、次なるWへ／W With W（前書き

久しぶりの更新なのに、中身がグダグダで台無しに…

「ふーん。そうなんだ。で、それとこれと私にどういう関係があるのかなー？七瀬　水樹♪？」

Aはテーブルに椅子、キッチンに寝室といった、至って普通の家のような感じの七瀬の固有世界に来ていた。

「七瀬でいい。お前は、音梨　楓を狙っているようだな。」

音梨　楓という言葉にAは反応した。

「へぇ……よく知ってるねぇ。で、音梨　楓がどうしたの？」

「彼女が他の誰かに可愛がられている、と言ったらどうする？」

七瀬は腕を組んで言う。

「ふん……奪い返して、私が可愛がってあげるかな～♪でもその証拠は？」

Aは、不敵に微笑んで尋ねる。

「無い。無いが確かな情報だ。」

「ふーん。でも私はあなたを信用する要素が無いんだよね～。帰らせてもらうね。」

Aは椅子から立ち上がる。
「信用しなくてもいいが、俺について来てもらう事には変わらないぞ。」
と言い、七瀬はあるものを取り出した。
「エターナルブラッド……！！……いつの間に盗ったのかな♪」
Aはニコリと笑った。
「移動中に。気づかずにってのは難しかったが。」
と言った瞬間、
「ふんっ！」
Aはテーブルを思いっ切り返した。
しかし、
「あァ！？」
と言い、七瀬は能力を解放し、テーブルとAを軽く吹き飛ばす。
テーブルにぶつかり、Aは壁に当たる。
「うっ…やるじゃない。……仕方がないね。協力してあげる♪でも、終わったらちゃんと…」

Aは立ち上がって言う。

「分かってる。ちゃんとエターナルブラッドは返す。」

「でも、私はどうやって戦うの？」

Aは首を傾げる。

「後で話す。まずは外に出る。」

七瀬は立ち上がったAを連れて、外に出た。

「がらあっ！くたばれ泥棒魔術師！！」

「ぞらあっ！落ちろ！！陰気女！！！」

オーズとレイブンは、上空で自らの翼を打ち付けあったり、殴り合って相手を落とそうしていた。

『なんかすごい戦いになって来ているね。』

「ああ……」

シンクとユウは2人の戦いを見守っていた。
ちなみに5人共、変身を解いて、バインドも解除されている。
烏夜曰わく、

「手を出したら、なんかの芸術作品みたいにしてあげるから♪」

四鳳曰わく、

「ラプラス、解除しても構わないよ。邪魔したら叩き潰すだけだから。」

との事であった。

（四鳳様……負けないでください……！）

ラプラスは、四鳳の勝利を祈っていた。

（烏夜……一体何者なんだ！？……水樹……お前は知っていたのか……？）

海堂は、烏夜に体を奪われた水樹の安否を心配していた。

地上に降りてきた二名は、猛スピードで突っ込んでいく。
レイブンは両腕についたかぎづめ、レイブンクローでオーズを抉るように、引っ掻く。

「あーあ。こんなもんなの？」

「ふんっ…！調子に乗ってんじゃないよ！！」

オーズは両肩についた角状外骨格、ワイドスティンガーをレイブンに向けて伸ばし、刺す。

「がっ……はっ……くそったれが……」

オーズは、大地から紫の斧、メダガブリューを引き抜く。

「これで終わらせる。」

オーズはメダガブリューにセルメダルを入れ、ティラノザウルスの頭を模したを部分を動かし、セルメダルを圧縮する。

『ゴックン』

「どう……かな……っ！！」

『ＲＡＶＥＮ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ！』

メダガブリューは、エネルギーを斧の形に形成する。
レイブンは右腕にエネルギーを圧縮し、巨大な爪の形に形成する。

「「がああああああああああっ！！」」

オーズとレイブンは必殺技、グランドオブレイジとレイブンリップを激突させる。周りに衝撃波が走る。

「ぐおおおおおおお！！！」

「ぜえぇぇぇぇぇぇ！！！」

メダガブリューとレイブンクローにひびが入る。

「「はあぁぁぁぁぁぁ！！」」

2人は力をフルパワーに解放し、そして、

2人の間に大爆発が起こる

どこかの廃工場の一角。
音梨　楓は上着を脱がされ黒いＴシャツの服に着替えさせられ、両腕を鎖に繋がれ、宙ぶらりんの状態にさせられ、気絶していた。

「……」

そんな楓に

「起きろ。」

「……っ！？　はっ…はっ……はっ…はっ……うっ……うん……」

サードはバケツに入った水を楓にぶちまけた。
楓は目を覚ます。

「目が覚めたか。音梨　楓。」

「うっ……あなたは……？」

楓はクラクラとしながら、尋ねる。

「私の名はサード。お前を連れ去った者だ。後お前の大切な物を頂

いている。」

と言い、サードは楓の首飾りを見せる。

「それは、エターナルムーン！？　どうしてあなたが……返してください！」

楓は体を揺さぶる。がしかし、状態は一向に変わらない。

「残念だが断る。お前の大切なＩＳ”エターナルムーン”は、私の力に必要だからな。」

「そんな……」

「それに、お前の世界もいずれ潰す。その時必ずお前の仲間が阻止しようとするだろう。
だからそいつらの弱点が知りたい。そいつらの癖、過去、精神的弱点も全て。今吐けば、何もせず、監禁してやる。」

「絶対に吐きません！私の大切な仲間、親友を売るなんて絶対に出来ません！！」

楓は、大きく言い切る。

「そうか……残念だな……なら仕方がない。

一生、笑えなくなるぞ？」

と言い、サードは電流が流れた棒を二本取り出した。

「な…何ですか？……それは……？」

「”電気くすぐり棒”だ。ＩＳは、肉体、精神を鍛えるようだが、こんな事は鍛えた事は無いだろう？」

と言い、棒を楓の胸に押し付けた。

「うっ…！？アハハハハハハハア゛ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ……！！」

暫くの間、工場周辺に笑い声が響いた。

「くっ……！」

「やるじゃない……！！」

烏夜と四鳳は、変身を解き、両者共に片膝をついていた。

「「うっ……」」

両者共に倒れ込んだ。

「四鳳様！」

ラプラスは、四鳳の下に急いで駆けつける。

「なっ…「オイ！！大丈夫か！？」」

海堂は駆けつけようとするが、先にユウが駆けつける。

「ラプラス……」

四鳳は、気絶する。

「……またいずれ、会いましょう……特にシンク、あなたは絶対に頂きます。四鳳様の欲しい者ですから……必ず……」

シンクを見つめて、ラプラスは四鳳を抱えて、その場を離れる。

「オイ！！大丈夫か！？　オイ！！っ！」

「くっ……うるさいわね……誰、あなた？」

「えっ、網走　ユウだけど……」

「ユウ……か…心配してくれてありがと……」

烏夜は礼を言う。

「えっ、あっ、どうも。」

ユウは頷く。

「……あなたの相棒、守ってやりなさいよ……うっ……限界ね……じゃあ……」

烏夜は光に包まれ、水樹の姿に戻る。

「うっ……」

「水樹！／水樹君！」

はやてと海堂は水樹に駆け寄る。

「急いで病院へ運ぼう。」

ソウキチは、２人をかき分け、水樹を抱える。

「案内してくれ。」

「頼んます。」

全員は、急いで病気に向かった。

1週間後、

シンク、ユウ、はやて、水樹は、事務所の外にいた。
「おやっさん、なんで待たせてんだろ？」
「さあ？ソウキチさん、海堂と何か話してるみたいだけど。」
「なんや難しい顔しとったなあ。」
「ああ…」
と言っているとソウキチの声がかかって、４人は入った。

ソウキチはユウとシンクに向かって言った。
「２人共……この３人と一緒に行け。」
「「……えっ……？」」
２人は唖然とした。
「おやっさん……どういう事だよ…」

「そうですよ！僕達はまだ…」

海堂は代わりに答える。

「シンク。君は歯車を持っている。四鳳は特に。だから君を守る為に。」

「連れて行くってかよ……でもおやっさん、俺達まだ…「ユウ。お前に依頼だ。」……えっ？」

ソウキチは溜めて言う。

「シンクと一緒に……俺を超えるぐらい強くなって帰って来い。」

「ソウキチさん…／／おやっさん……」

「ふっ……安心しとけ。この世界はソウキチさんと……ミコトさんに任せておけ。シンク、歯車とこの世界はしっかり繋げておいた。2人共……一言。」

海堂は2人の肩叩いて、外に出た。
はやてと水樹も空気を読んで、外に出た。

「おやっさん……俺、絶対に強くなって帰って来るからな。」

ユウは先に出て行く。

「ソウキチさん…ユウを支える存在になるよう頑張ります。」

シンクも出て行く。

「……」

ソウキチは静かに見送る。

「やっぱりハードボイルドだねぇ～ソウキチ～」

陰からミコトが現れる。

「2人が心配か～？」

「ふっ……そんな事は無い。あいつらは、強くなって帰って来る。絶対な……」

Raven stage／勝負にEを、次なるWへ／W With W（後書き

感想待っております。

海狼物語０ －Ｕ（前書き）

久し振りの投稿。

でもグダグダ……

しかも、主役一行未登場。

「うっ……」

楓は、サードの電気くすぐり棒にくすぐられた後、身体を縛られ、どこかの倉庫の中に監禁されていた。

「エターナルムーン……どうしましょう……椛……」

真っ暗な倉庫でポツリと言う楓。当然の事ながら、誰の返事も来ない。

楓の言う椛とは、楓のもう一つの人格であり、楓の事を愛してやまない、楓とは対照的なもう一人の楓である。

「この世界……何だか不思議と居心地いい……（まるで、元々この世界にいた感じ……）……でも、今はこの状況をなんとかしなくちゃ。」

楓は決意しつつ、周りにこの状況を抜け出せる物を探した。

楓を監禁している倉庫の近くの廃墟。

「博士。エターナルムーンと音梨楓の情報を送った。」

サードはタッチ式タブレット端末に向かって話した。

「ああ。いい情報(モノ)もらったぞ。これで新たな部隊が作れる。」

博士と呼ばれた男は大層喜んで言う。

「それと、博士とは呼ぶな。普通に大吾と呼べ。」

「悪いな。」

サードは申し訳なさそうに答えた。

「それはそうと、これからどうするんだ？この世界に用はないだろう。」

「確かにな。元々音梨楓を連れ出すのに適当に選んだ世界だからな。用はないが、少しここで一騒動でも起こそうと思っている。色々な世界の一部分が集まって出来た世界は初めてでな。」

サードはワクワクしていた。

「で、必要な物は？」

画面越しに大吾は聞いてくる。

「そうだな……一般人を簡易に怪人に変える事が出来る……Ｔ２ガイアメモリはないか？」

「あるが……あるデータが少し破損している。一部のメモリは、復元できない。ただ、オリジナルのＴ２ガイアメモリにない種類を作ってみる。時間はかなりかかるが。」

「分かった。後はそれだけだ。世話をかけてすまないな。」

「別に構わない。後、俺の実験で色々な怪人を組み合わせた怪人の試作体をそっちにメモリと一緒に送る。自由に使ってくれ。」

「ほぅ、分かった。有り難く使わせてもらう。で、どんな奴なんだ？その試作体は。」

その質問に大吾はきっぱりと答える。

「オルフェノクとワームを掛け合わせた怪人だ。我が輩は猫である（名前は未だ無い）だ。」

「漱石か……まあ、取り敢えずこの世界を彷徨く。準備が出来次第連絡を。」

「了解。」

サードは、通信を切った。そして、廃墟を後にした。空はすっかり暗くなっていた。

廃墟を出て、しばらくしてサードは立ち止まって、右手に持ってい

たエターナルムーンをまじまじと見る。

「……エターナルムーンか……少し面白いようにしてやるか。」

と言って、サードは服の袖から極小サイズの黒い液体金属を右手に持っていたエターナルムーン付着させる。すると、液体金属はエターナルムーンに吸収される。

「ふっふっふっ。いくぞ、エターナルムーン。」

そう言った瞬間、サードは楓しか展開出来ない筈のエターナルムーンを展開した。そして、そのまま、空に舞っていった。

真夜中…

とある一般道路に一台の車が走っていた。

「すまないな、ゆり。俺の週一のパトロールに付き合ってくれて。」

運転している男性は、助手席に座っている女性”仲村ゆり”に話し

た。

「別にいいですよ、木場さん。若手の私を誘ってくださって。あっ、だったら今度何か奢って下さいよ。」

ゆりは、運転している男性”木場　鷹之”に返答した。

「分かったよ。ただし、酒は駄目だぞ。未だ１９だし。」

「分かってますよ。

そういえば、椛先輩の妹さんの楓ちゃんは、どうなんですか？」

「ああ、元気にしているよ。勿論、終も。」

木場は、ニコッと答える。

「はぁ～…うちの課って、なんて暇な課何ですかね……もっとやりがいのある事件とか無いんでしょうかね……」

「仕方が無いよ。まっ、事件が無くて平和なのが一番だけどね。」

「まっ、それもそうですよね。」

なんて雑談をする２人。

この２人は特能課と呼ばれる警察内部にある特別な部署で２人はそこに所属している上司と部下である。勿論、部員は他にもいる。そして、部員は全員特別な存在でもあった。

ヴィン……

「ん？何か聞こえませんでしたか？」

「ああ、確かに聞こえた。でもどこから……？「あっ！あそこです！何か飛んでます！」どこ！？…あれか！」

ゆりと木場は、飛んでいた方向を見るが、雲に隠れて見失った。

「あの方向って確か…」

「ああ、前に一課があたっていた事件現場に近い。取り敢えず、そこに行こう。」

木場は、車を現場に向かわした。

そんなこんなで、現場ー

「ううっ……何か怪しげな雰囲気が……木場さん、やっぱりもしもの事を考えて、なっといていいですか？オルフェノクに。」

「駄目だ。ただでさえ拳銃の携帯が許可されてるのに、なったら即クビだ。ここは我慢だ。」

木場はペンライトとハンドガン”DE（デザートイーグル）”を取り出す。
それを見たゆりは、同じくハンドガン”オペレーター”を取り出す。
オペレーターには、ライトとサプレッサーを装着している。

「でももしの事があったらどうするんですか？未だ試作機体とはいえ、G3ーXも無いんですよ。」

「大丈夫。カイザギアは、ちゃんと持ってきてあるから。まっ、いつもだけど。」

「あっ、木場さんズルい。」

「取り敢えず、先ずは廃墟の内部を調べよう。後で倉庫を調べよう。」

「結局、廃墟には何もなかったですね。」

「じゃあ、後は倉庫だけだ。」

と言って2人は倉庫の扉の両端に待機した。そして、木場の合図と共に扉を開け放った。

「……」

「……結構広い倉庫ですね……」

カラン……

「！！？……木場さん。」

「分かってる……先頭に出る。後ろを。」

「了解。」

2人は、音のある場所へと恐る恐る向かった。
そこには……

「！！？楓！」

「えっ！？楓ちゃん！？」

縛られた姿の音梨楓が、グッタリとしていた。

「ううっ……（あなた達は……一体…？）」

海狼物語０－Ｕ（後書き）

サード……井上　喜久子

大吾……山寺　宏一

木場鷹之…藤原　竜也

とな感じです……

調子乗ってすみません…

感想待ってます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1040w/

仮面ライダーギアス

2011年10月21日01時01分発行